

(品目別需給編)

1 小麦

(1) 国際的な小麦需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

2022/23 年度

生産量 前年度比 前月比

- ・カザフスタン、豪州、インド等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

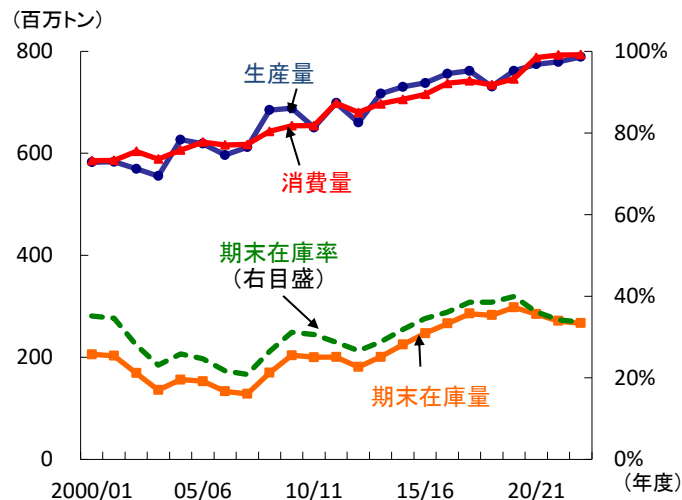
消費量 前年度比 前月比

- ・バングラデシュ、タイ等で下方修正されたものの、インド、カザフスタン等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 前月比

- ・アルゼンチン、インド等で下方修正されたものの、カザフスタン、豪州、ブラジル等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比 前月比



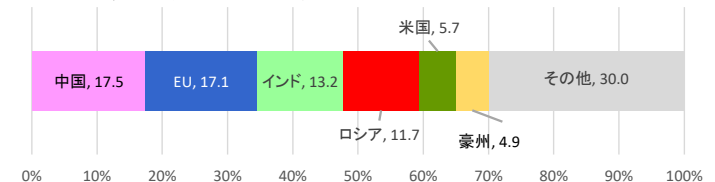
◎世界の小麦需給

(単位: 百万トン)

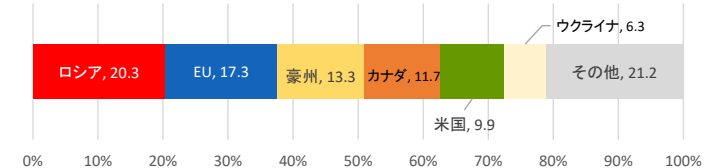
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	774.4	779.2	788.9	5.1	1.2
消 費 量	787.7	792.7	793.2	2.0	0.1
うち飼料用	162.9	160.3	158.5	0.7	▲ 1.1
輸 出 量	203.3	202.9	213.9	1.0	5.5
輸 入 量	194.8	199.2	208.4	1.3	4.6
期末在庫量	284.9	271.5	267.2	▲ 2.1	▲ 1.6
期末在庫率	36.2%	34.2%	33.7%	▲ 0.4	▲ 0.6

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」 (8 March 2023)

○ 2022/23年度の世界の小麦の生産量(788.9百万トン)(単位: %)



○ 2022/23年度の世界の小麦の輸出量(213.9百万トン)(単位: %)



○ 2022/23年度の世界の小麦の輸入量(208.4百万トン)(単位: %)



(2) 国別の小麦の需給動向

＜ 米国 ＞ 2023/24 年度の冬小麦への干ばつの影響を懸念

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく 44.9 百万トンと前年度に比べ 0.2%増加したものの、2003/04 年度以降では 2021/22 年度に次ぐ低水準となる見込み。同「Crop Production」(2023.3.8)によれば、冬小麦、春小麦、デュラム小麦の生産量は、それぞれ、30.0 百万トン、13.1 百万トン、1.7 百万トン。

2023/24 年度の冬小麦の播種面積は、同「Winter Wheat and Canola Seedings」(2023.1.12)等によれば、高水準の小麦相場を反映して、2015/16 年度以降最高の 14.95 百万ヘクタールの見込み。

同「Wheat Outlook」(2023.3.10)によれば、前年 11 月に冬小麦生産地の約 75%を占めた干ばつ状態は、3 月 14 日現在で約 53%に縮小したものの、2023/24 年度の冬小麦にとって依然として懸念材料となっている。地域別には、プレーンズ南部のハード・レッド・ウインター (HRW) の主要生産地の大部分で干ばつ状況が続いている。一方、米国東部のソフト・レッド・ウインター (SRW) や北西部のホワイト小麦 (SW) の生産地では干ばつが概ね終息しており、生育への影響はほぼない見込み。

3 月 5 日現在、HRW 主要産地の作柄評価 (やや良い～良) は、州によって傾向は異っており、生産量が第 1 位のカンザス州では、1 月 29 日時点の 21%から悪化して 17%となり、前年同時期の 24%を下回った。一方、オクラホマ州とテキサス州の作柄評価(3 月 5 日時点)は 39%、19%と、1 月 29 日時点の 17%、14%から改善し、それぞれ前年同時期の 15%、7%を上回っている。一部の州では改善が見られるが、今後の天候が単収を決める重要な要因となる。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、21.1 百万トンで 1972/73 年度以降最低の見込み。他の主要輸出国に比べ、輸出価格の競争力が弱く、2022 年 6 月～2023 年 2 月までの累計輸出量は前年度同時期を 2%下回っている。2023 年 2 月の輸出先国は、メキシコ(16.1%)、日本(14.5%)、フィリピン(10.1%)の順。

なお、輸出価格(FOB)は、他の輸出国との価格競争から、2 月 6 日時点の 391 ドル/トンから 364 ドル/トン(3 月 3 日時点)に低下したものの、小麦主要輸出 6 か国の中で一番高い。

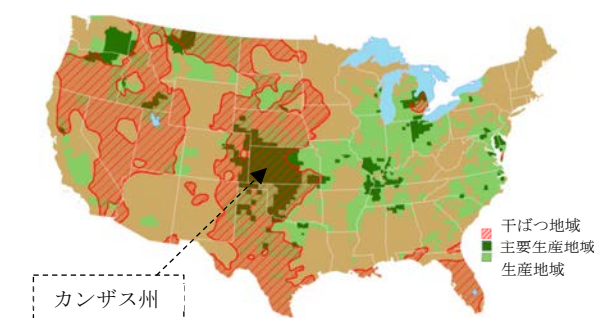
米国の期末在庫量は、15.5 百万トンと 2008/09 年度以降最低であり、期末在庫率は 29.9%と 2014/15 年度以降最も低い。

小麦一米国 (冬小麦が全体の 7 割、春小麦は 3 割)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年6月～23年5月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	49.8	44.8	44.9	-	0.2
消 費 量	30.4	29.6	30.6	-	3.4
うち飼料用	2.5	1.6	2.2	-	36.3
輸 出 量	27.1	21.8	21.1	-	▲ 3.2
輸 入 量	2.7	2.6	3.3	-	26.3
期末在庫量	23.0	19.0	15.5	-	▲ 18.6
期末在庫率	40.0%	37.0%	29.9%	-	▲ 7.1
(参考)					
収穫面積(百万ha)	14.89	15.03	14.36	-	▲ 4.5
単収(t/ha)	3.34	2.98	3.13	-	5.0

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」
「World Agricultural Production」(8 March 2023)

図: 米国冬小麦生産地帯と干ばつ地域



資料: USDA「Crop Production」(2023.3.14)

表: 米国産小麦の輸出先国別輸出量

2023年 (2023年2月)			2023年 (2023年1月5日～3月2日)			2022年 (2022年1月6日～3月3日)		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
メキシコ	28.5	16.1	メキシコ	59.7	16.5	メキシコ	63.0	17.5
日本	25.6	14.5	日本	50.6	14.0	日本	53.1	14.7
フィリピン	17.9	10.1	フィリピン	38.2	10.6	フィリピン	43.7	12.1
中国	13.6	7.7	韓国	27.3	7.6	ナイジェリア	24.6	6.8
イラク	10.5	5.9	中国	27.1	7.5	韓国	22.6	6.3
台湾	10.0	5.7	イラク	21.0	5.8	台湾	19.2	5.3
インドネシア	6.8	3.8	台湾	19.0	5.3	エル・サルバドル	13.4	3.7
その他	63.9	36.1	その他	118.6	32.8	その他	120.9	33.5
計	176.8	100.0	計	361.5	100.0	計	360.5	100.0

※2023 年 2 月は、2023 年 2 月 3 日～3 月 2 日の合計値
資料: USDA「Federal Grain Inspection Services Yearly Export Grain Totals」(2023.3.10)

＜ カナダ ＞ 2022/23 年度の春小麦・デュラム小麦の品質は良好

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2023.3.21)によれば、2022/23 年度の小麦全体の生産量は、前月予測からの変更はなく、33.8 百万トンの見込み。

なお、品種別には、普通小麦が 28.4 百万トン、デュラム小麦が 5.4 百万トンとなる見込み。

カナダ穀物委員会(Canadian Grain Commission: CGC)によれば、春小麦及びデュラム小麦の品質は良好で、春小麦(カナディアン・ウエスタン・レッド・スプリング:CWRS)の 93%、デュラム小麦の 81%が 1、2 等に格付けされた。またタンパク質含有量は、CWRS は平均以上の 13.9%、デュラム小麦は平均レベルの 14.5%に回復し、ともに輸入国の需要を満たす水準とみられる。

また、AAFC によれば、 平年並みの天候を前提とすれば、2023/24 年度の小麦全体の生産量は、前年度に比べ 1.5 %増の 34.3 百万トン。そのうち、普通小麦は播種面積が増加することから、同 1.5%増の 28.9 百万トン、デュラム小麦は、播種面積が他の作物の作付けへのシフトにより減少するものの、単収が上昇し、同 0.1%増の 5.4 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】AAFC によれば、2022/23 年度の小麦全体の輸出量は、前月予測から 0.2 百万トン上方修正され、前年度に比べ 61.5%増加の 24.3 百万トン。そのうち、普通小麦は好調な輸出ペースが継続しているため、前月予測から 0.2 百万トン上方修正され、前年度に比べ 58.1%増加の 19.5 百万トンとなる見込み。また、デュラム小麦は、前月予測からの変更はなく、前年度に比べ 76.7%増加の 4.8 百万トンの見込み。

CGC によれば、2022 年 8 月～2023 年 1 月の輸出量は、普通小麦が 994.3 万トン、デュラム小麦が 271.1 万トンの計 1,265.4 万トン。種類別の輸出先国は、普通小麦は中国(19.0%)、インドネシア(9.4%)、日本(5.6%)の順で、アジア向けが多い。デュラム小麦は、イタリア(32.4%)、アルジェリア(16.6%)、モロッコ(12.7%)の順で、イタリアや北アフリカ向けが多い。

また、AAFC によれば、2023/24 年度の輸出量は、前年度に比べ 1.2%減の 24.0 百万トンの見込みで、普通小麦が同 0.5%増加の 19.6 百万トン、デュラム小麦は、欧州の生産量回復による輸入需要の減少が見込まれ、同 8.3%減少の 4.4 百万トンの見込み。

USDA によれば、2022/23 年度の期末在庫量は、前月予測の変更はなく、史上最低の 3.5 百万トンとなる見込み。ここ数年、カナダの期末在庫量は減少傾向となっている。

小麦－カナダ（春小麦を主に栽培）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23(22年8月～23年7月)		
			予測値、() はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	35.4	22.4	33.8 (33.8)	-	50.8
消費量	9.1	10.2	9.6 (8.9)	-	▲ 5.9
うち飼料用	4.2	5.2	4.5 (4.5)	-	▲ 12.6
輸出量	26.4	15.1	25.0 (24.3)	-	65.3
輸入量	0.6	0.6	0.6 (0.1)	-	9.1
期末在庫量	6.0	3.7	3.5 (4.4)	-	▲ 3.3
期末在庫率	16.7%	14.5%	10.2% (13.2%)	-	▲ 4.2
(参考)					
収穫面積(百万ha)	10.02	9.20	10.08 (10.08)	-	9.6
単収(t/ha)	3.54	2.44	3.35 (3.35)	-	37.3

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 March 2023)
AAFC 「Outlook For Principal Field Crops」(21 March 2023)

図 カナダ産小麦の生産量、輸出量、期末在庫量の推移

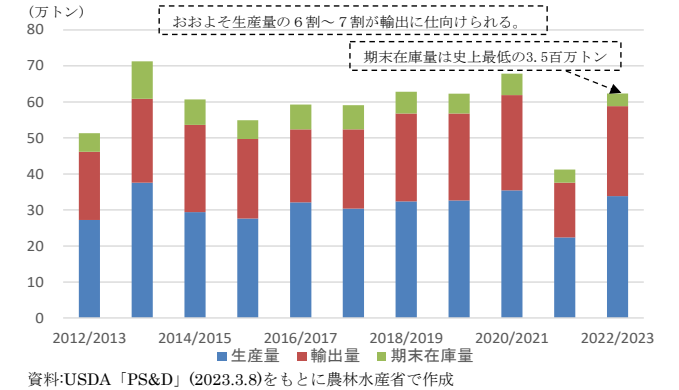


表 カナダ産普通小麦、デュラム小麦の輸出先国別輸出量
(普通小麦) (デュラム小麦)

2022年12月			2022年8月から12月			2022年12月			2022年8月から12月		
国名	輸出量 (万トン)	シェア(%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア(%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア(%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア(%)
中国	37.1	23.8	中国	174.0	21.6	モロッコ	10.6	29.8	イタリア	62.3	32.4
インドネシア	28.6	18.3	インドネシア	77.5	9.6	イタリア	8.2	23.0	モロッコ	30.4	15.8
パナマ	11.7	7.5	パナマ	67.8	8.4	チュニジア	6.2	17.4	米国	22.8	11.9
日本	8.5	5.4	日本	64.3	8.0	米国	4.9	13.8	アルジェリア	17.1	8.9
ロシア	6.9	4.4	ベルギー	57.6	7.1	U.A.E	3.4	9.6	チュニジア	16.4	8.5
その他	63.2	40.5	その他	365.3	45.3	その他	2.3	6.5	その他	43.0	22.4
計	156.0	100.0	計	806.5	100.0	計	35.6	100.0	計	192.0	100.0

注1: Canadian Grain Commissionが認可したエレベーターから輸出された小麦(Licensed)のみのデータ。
注2: 普通小麦の品種はNO.1-3 Canada Western Red Spring No.1 Canada Western Red Winter
No.2 Canada Eastern Red Spring No.2 Canada Eastern OatデュラムはCanada Western Amber Durum Others
資料: Canadian Grain Commission/Export of Canadian Grain and Wheat Flour/2023.1.23をもとに作成。

＜ 豪州 ＞生産量は史上最高の 39.0 百万トン

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の実産量は、単収の上昇により、前月予測から 1.0 百万トン上方修正され 39.0 百万トンと前年度の 36.2 百万トンを 7.6%上回り史上最高の見込み。

豪州農業資源経済科学局(ABARES)「Australian Crop Report」(2023.3.7)によれば、2022/23 年度の実産量は史上最高の 39.2 百万トンの見込み。

主要生産州では、西部のウェスタンオーストラリア州(WA 州)の小麦生産量は、史上最高であった前年度を 7 %上回る 13.8 百万トン(過去 5 年平均比 52.6%増)の見込み。作付け当初に良好な天候に恵まれたことや、その後も作物の生育期を通じて適時な降雨で十分な土壌水分量となったこと、霜害の発生が最小限に留まったことが生産量増加の要因。なお、春の低温により成熟がゆっくり進んだことで単収は増加したものの、タンパク質含有量が昨年より低い水準となった。

東部のニューサウスウェールズ州(NSW 州)の実産量は、10.3 百万トンと前年度を 15%下回るものの、過去 5 年平均を 53.9%上回る見込み。NSW 州では中西部と北部で例年になく降雨が多く、作付け遅延による耕作放棄が一部で生じた。その後、降雨で洪水も発生したが、夏に乾燥した天候に恵まれ、予想よりも生産量は回復した。なお、予想された洪水による品質低下に関し、同州中部及び南部で低タンパク質の飼料用グレードの小麦の生産割合が例年より多くなった一方、同州北部では高タンパク質含有量の小麦が例年と同様の割合で生産された。

豪州気象局によれば、2022 年に記録的な降雨をもたらしたラニーニャ現象は弱まる見込み。ABARES「Agricultural commodities」(2023.3.7)によれば、乾燥天候になった場合、2023/24 年度の実産量は 28.2 百万トンに減少する見込み。しかしながら、2022 年に降雨が多かった東部の州では、土壌水分が蓄積されているため、生産量は平均を上回ると見られている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、史上最高の生産量による豊富な輸出余力から、前月予測から 0.5 百万トン上方修正され、史上最高の 28.5 百万トンの見込み。

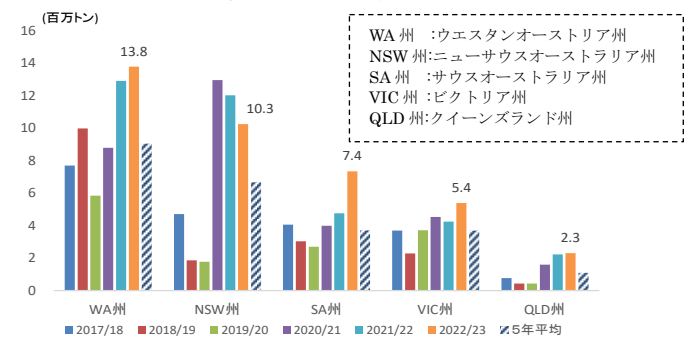
豪州統計局によれば、2022 年年間輸出量は前年(2,550.9 万トン)を 12.8%上回る 2,878.6 万トン。輸出先国は、中国(21.5%)、インドネシア (15.1%)、フィリピン(11.4%)の順。豪州の輸出先は、地理的に近く他の主要輸出国に比べ輸送コストが安価となるアジア市場が多い。2023 年 1 月の輸出量は 334.6 万トンで前年同月を 25.9%上回る。輸出先国は、中国 28.3%、インドネシア 15.7%の順。

小麦－豪州 (冬小麦を主に栽培) (単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	31.9	36.2	39.0 (38.1)	1.0	7.6	
消 費 量	8.0	8.5	8.5 (8.7)	-	▲ 0.4	
うち飼料用	4.5	5.0	5.0 (5.0)	-	-	
輸 出 量	23.8	27.5	28.5 (27.7)	0.5	3.6	
輸 入 量	0.2	0.2	0.2 (0.3)	-	▲ 4.8	
期末在庫量	3.0	3.4	5.6 (4.0)	0.5	64.1	
期末在庫率	9.5%	9.5%	15.2% (11.0%)	1.2	5.7	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	12.64	12.73	13.00 (13.0)	-	2.1	
単収(t/ha)	2.52	2.85	3.00 (2.93)	0.08	5.3	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 March 2023)
IGC 「Grain Market Report」(16 February 2023)

図：豪州の州別小麦生産量の推移



資料：ABARES「Australian Crop Report(2023.3.7)」をもとに農林水産省で作成

表：豪州の小麦輸出量及び輸出先国

2023年1月			2022年1月～2022年12月			2021年1月～2021年12月		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
中国	94.6	28.3	中国	619.8	21.5	インドネシア	493.6	19.4
インドネシア	52.4	15.7	インドネシア	433.3	15.1	ベトナム	301.6	11.8
韓国	35.3	10.5	フィリピン	328.3	11.4	中国	293.6	11.5
フィリピン	33.4	10.0	ベトナム	289.8	10.1	フィリピン	198.4	7.8
イエメン	18.6	5.5	韓国	211.4	7.3	日本	118.9	4.7
ベトナム	16.0	4.8	日本	125.6	4.4	マレーシア	114.5	4.5
その他	84.4	25.2	その他	870.4	30.2	その他	1030.2	40.4
計	334.6	100.0	計	2878.6	100.0	計	2550.9	100.0

資料：豪州統計局の資料をもとに農林水産省で作成

< EU27+英国 > 飼料用とうもろこしの代替としての小麦輸入量は上方修正

【生育・生産状況】欧州委員会(2023.2.23)によれば、EU27 の 2022/23 年度の生産量は、前月予測に比べ 0.4 百万トン下方修正され、前年度に比べ 2.6%減少の 134.1 百万トンの見込み。

そのうち、普通小麦の生産量は、ラトビア等で上方修正されたものの、ブルガリア、ドイツで下方修正されたことから、前月予測に比べ 0.4 百万トン下方修正され、127.0 百万トン。デュラム小麦は、スロバキア等で下方修正されたものの、ギリシャ等で上方修正されたことから、前月予測からわずかに上方修正され、7.1 百万トンの見込み。

また、USDA によれば、EU27 及び英国の生産量は、それぞれ前月予測からの変更はなく 134.7 百万トン、15.5 百万トンで、EU27 及び英国の生産量の合計は 150.2 百万トン(前年度比 1.3%減)。

2023/24 年度の冬小麦は、2 月中旬までの平年を上回る気温から、欧州西部・中部で再生長が始まったが、2 月末からの気温低下が生育の障害となった。また、2 月中旬から下旬に欧州の大部分で降雨があったものの、スペイン、フランス、イギリスでは依然として降雨不足の状況である。

なお、フランスアグリメール(2023.3.9)によれば、フランス産の生育状況を示す「とても良い」「良い」の割合は、普通小麦が 95%、デュラム小麦が 91%とそれぞれ前年度の 92%、87%を上回った。

【貿易情報・その他】USDA によれば、EU27 の 2022/ 23 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、9.0 百万トンの見込み。前年度(4.6 百万トン)に比べると、ウクライナからの輸入ペースが堅調なことから約 2 倍に増加する見込み。輸入されたウクライナ産小麦は生産減となった EU 産とうもろこし飼料の代替となる見込み。また、EU27 の輸出量は、前月からの変更はなく 37.0 百万トン。

欧州委員会によれば、2022 年 12 月の輸入先国は、普通小麦がウクライナ(74%)、カナダ(11%)、ロシア(8%)、デュラム小麦がカナダ(87%)、ウクライナ(6%)、カザフスタン(4%)の順。

EU は 2022 年 7 月に高温乾燥に見舞われたが、2022 年 7～12 月の輸出量は、普通小麦が 1,773.5 万トン(前年度同期 1,575.9 万トン、過去 5 年平均 1,355.5 万トン)、デュラム小麦も 44.2 万トン(同 35.9 万トン、同 42.8 万トン)といずれも前年度同期及び過去 5 年平均を上回った。

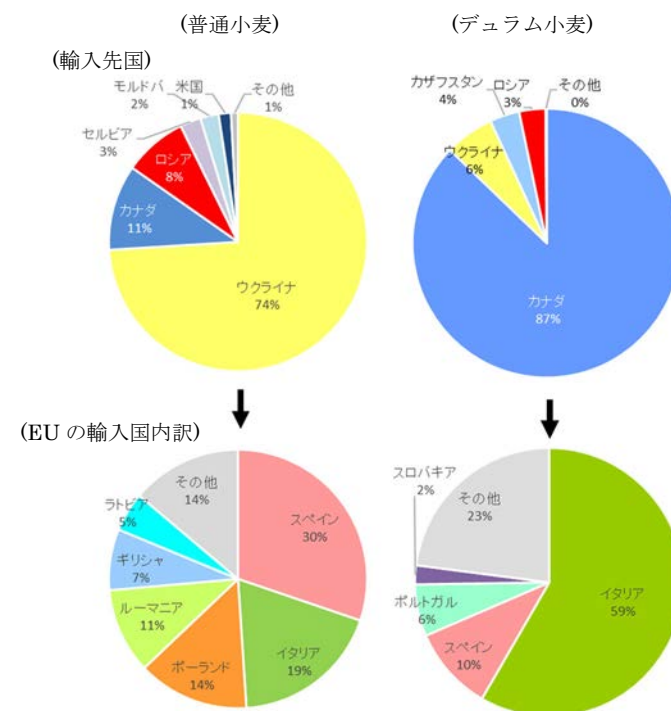
輸出先国は、普通小麦はモロッコ(14.0%)、アルジェリア(12.8%)、エジプト(9.0%)の順で、北アフリカ諸国向けが多い。また、デュラム小麦はイスラエル(14.5%)、アラブ首長国連邦(14.3%)、タンザニア(11.0%)の順であり、中東、アフリカ向けが多い。

小麦－EU27+英国 (冬小麦を主に栽培) (単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23(22年7月～23年6月)		
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	136.3	152.2	150.2 (149.2)	-	▲ 1.3
消 費 量	118.2	123.7	124.8 (123.8)	-	0.9
うち飼料用	48.5	52.4	52.8 (51.6)	-	0.8
輸 出 量	30.2	32.8	38.3 (35.6)	-	16.9
輸 入 量	8.6	7.3	10.8 (10.7)	-	48.8
期末在庫量	12.1	15.2	13.1 (18.2)	-	▲ 13.8
期末在庫率	8.2%	9.7%	8.0% (11.4%)	-	▲ 1.7

(参考)
 収穫面積(百万ha) 24.36 26.05 26.10 (26.00)
 単収(t/ha) 5.60 5.84 5.75 (5.74)
 資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
 「World Agricultural Production」(8 March 2023)
 IGC 「Grain Market Report」(16 February 2023)
 表内及び () 内のデータはEU27ヶ国+英国のデータ

図 EU27 の普通小麦及びデュラム小麦の貿易割合(2022 年 12 月)



資料：EU 委員会 Cereals export and imports(2023.2.17)

＜ 中国 ＞ 2022 年の小麦輸入は、豪州産が 57.9%を占める

【生育・生産状況】中国糧油情報センター「食用穀物市場需給状況月報」(2023.3.6)によれば、2022/23 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度に比べ 0.6%増加の 137.7 百万トンと史上最高となる見込み。作期別の生産量は、冬小麦が 132.7 百万トン(前年度比 0.8%増)、春小麦が 5.0 百万トン(同 4.2%減)の見込み。

同情報センターによれば、2 月下旬、安徽省、河北省、江蘇省、湖北省の一部では越冬期末期を迎えている。また、陝西省、山西省、安徽省の一部ではすでに再生長期に入った。中国全土の冬小麦生産地域の天候条件は良好で、土壌水分も十分となっており、再生長には適した状況となっている。

なお、河南省の一部では、例年に比べ、3～6 日早く再生長期に入っている。

【貿易情報・その他】中国糧油情報センターによれば、輸入量は前月予測からの変更はなく、前年度(9.56 百万トン)並みの 9.60 百万トンの見込み。

中国海関統計によれば、2017 年から 2022 年までの 6 年間では、米国、カナダ、豪州が主な輸入先国であり、カザフスタン、ロシアからも輸入をしている。また、2019 年からフランス産の輸入が継続している。

また、2022 年の年間輸入量は、前年度(971.8 百万トン)に比べ 1.6%増加の 987.3 万トン。輸入先国は、豪州、カナダ、フランスの上位 3 か国で 93.2%を占めた。2021 年と比べると、2022 年は豪州が全体の 57.9%と大きく増加した一方、カナダは減少、米国は大きく減少した。中国は、カナダ、米国から高たんぱく質小麦を、豪州から麺、饅頭用として低たんぱく質小麦をそれぞれ輸入しているとみられる。

USDA によれば、中国の期末在庫量は、前月予測から 0.5 百万トン下方修正され、139.6 百万トンとなる。世界の期末在庫量に占める中国の割合は 52.2%と半分を超えており、中国を除く世界の期末在庫量は 127.6 百万トンと 2013/14 年度以降最低となる見込み。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2023 年 1 月号」によれば、1 月の国内市場においては、春節が近づくとつれ、市場での小麦粉需要は終盤となり製粉業者の稼働率は徐々に低下したため、小麦の需要は弱まった。一方、政府の臨時備蓄小麦の競売と大量の輸入により、市場の小麦供給は十分となり、国内小麦価格は小幅下落した。十分な供給から、今後、国内小麦価格は安定すると思われる。

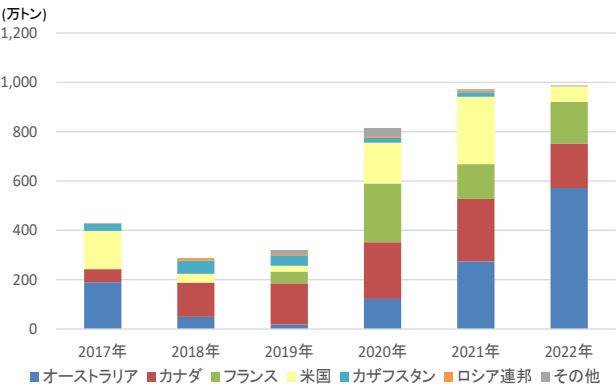
小麦－中国（冬小麦を主に栽培）

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年7月～23年6月)			
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	134.3	137.0	137.7 (137.7)	-	-	0.6
消費量	155.0	148.0	144.0 (139.6)	-	-	▲ 2.7
うち飼料用	45.0	35.0	30.0 (25.0)	-	-	▲ 14.3
輸 出 量	0.8	0.9	0.9 (1.1)	-	-	2.3
輸 入 量	10.6	9.6	10.0 (8.7)	-	-	4.5
期末在庫量	139.1	136.8	139.6 (138.7)	▲ 5.0	-	2.1
期末在庫率	89.3%	91.9%	96.3% (98.6%)	▲ 3.5	-	4.5
(参考)						
収穫面積(百万ha)	23.38	23.57	23.52 (23.6)	-	-	▲ 0.2
単収(t/ha)	5.74	5.81	5.86 (5.83)	-	-	0.9

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 March 2023)
IGC 「Grain Market Report」(16 February 2023)

図：中国の小麦輸入量と輸入先国の推移



表：中国の小麦輸入量と輸入先

(輸出量: 万トン、シェア%)

2022年12月			2022年1月～2022年12月			2021年1月～2021年12月		
国 名	輸入量	シェア	国 名	輸入量	シェア	国 名	輸入量	シェア
豪州	55.1	51.6	豪州	572.0	57.9	豪州	273.4	28.1
カナダ	36.5	34.2	カナダ	179.0	18.1	米国	272.6	28.1
フランス	12.7	11.9	フランス	169.8	17.2	カナダ	254.0	26.1
米国	1.2	1.1	米国	62.6	6.3	フランス	141.6	14.6
カザフスタン	0.8	0.7	カザフスタン	3.1	0.3	カザフスタン	18.7	1.9
ロシア	0.6	0.5	ロシア	0.9	0.1	ロシア	6.6	0.7
-	-	-	-	-	-	ロシア	4.9	0.5
計	106.8	100.0	計	987.3	100.0	計	971.8	100.0

資料：中国海関統計(2023. 1. 20)をもとに農林水産省で作成資料

＜ ロシア ＞ 生産量、輸出量とも前月から上方修正され史上最高

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量(クリミア地域分を含まず)は、前月予測からの変更はなく、史上最高の92.0百万トン(前年度比22.4%増)となる見込み。作期別生産量は、冬小麦、春小麦とも前月予測からの変更はなく、それぞれ68.0百万トン(前年度比30.3%増)、24.0百万トン(同4.5%増、史上最高)。なお、ロシア連邦統計庁(2023.3.10)によれば、2022/23年度の生産量は前年度比37.0%増の104.2百万トン(冬小麦：74.0百万トン、春小麦：30.2百万トン)の見込み。

現地情報会社によれば、2023/24年度の冬小麦の播種面積は、前年度(29.40百万ヘクタール)に比べ1.4%減少の29.05百万ヘクタールの見込み。なお、昨年12月、パトルシェフ農相は小麦の値崩れを防ぐために、播種面積を削減する必要があると発言している。

冬小麦の生育状況は、ロシアヨーロッパ部南部の一部で再生長が始まった。一方、北部では圃場に氷層が形成されたため、その影響が懸念されている。一方、アジア部のウラル地域では越冬は順調に進んだ。なお、3月初旬時点で、ロシアの冬穀物等の越冬状況は93%以上が良好または並みであった。

また、ロシア南部では春穀物等の播種が開始された。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度に比べ31.8%増加の43.5百万トンの見込み。また、ロシア産小麦の輸出価格(FOB)は、豊富な輸出余力から、3月3日時点で295ドル/トンと前月(2月6日時点305ドル/トン)より下落し、主要小麦輸出国の中で最低となった(最高は米国の364ドル/トン)。

現地情報会社によれば、旧来の輸出先である中東、北アフリカ諸国向けの輸出量は、ウクライナ侵攻前後(注)では、国ごとで増減があるものの、全体量としては大きな変化はない。国別には、伝統的な輸出先国であるイラン向けは減少したものの、サウジアラビア向けは増加。当初減少していたトルコ向けは2022年10月から輸出が増加している。

また、2023年2月の輸出量は、前月に比べ22.1%減少したものの、同月の過去3年平均(276.3万トン)を上回る303.8万トンと高い水準にある。なお、当初の予測に比べ2月の輸出量は伸びなかったが、その要因は、悪天候による港湾の稼働が低下したことによるものとみられる。このため、一部が3月分の輸出に持ち越され、3月は同月としては最高の435万トンになると見込まれている。

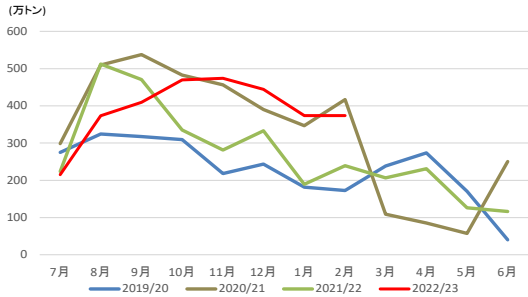
(注) (2020/21年度及び2021/22年度(7月～翌年2月)の平均と2022/23年度(7月～翌年2月)の輸出数量比較)

小麦一口シア(主産地の欧州部で冬小麦、シベリアで春小麦を栽培)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23(22年7月～23年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生 産 量	85.4	75.2	92.0 (95.4)	-	22.4
消 費 量	42.5	42.8	45.5 (45.8)	-	6.4
うち飼料用	19.0	19.5	21.5 (20.5)	-	10.3
輸 出 量	39.1	33.0	43.5 (43.6)	-	31.8
輸 入 量	0.4	0.3	0.3 (0.2)	-	-
期末在庫量	11.4	11.1	14.4 (17.5)	-	29.8
期末在庫率	13.9%	14.6%	16.2% (19.5%)	-	1.5
(参考)					
収穫面積(百万ha)	28.68	27.63	29.10 (28.7)	-	5.3
単収(t/ha)	2.98	2.72	3.16 (3.32)	-	16.2

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 March 2023)
IGC 「Grain Market Report」(16 February 2023)

図：ロシアの月別小麦輸出量の推移



資料：現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

表：ロシア産小麦の主なアフリカ諸国、中東諸国への輸出量と輸出先国

アフリカ諸国			増減率	中東諸国			増減率
国名	2020/21年度 2021/22年度 輸出量の平均	2022/23年度 輸出量		国名	2020/21年度 2021/22年度 輸出量の平均	2022/23年度 輸出量	
エジプト	575.8	540.4	-6.1	トルコ	555.0	514.2	-7.3
アルジェリア	171.4	135.3	-21.0	イラン	282.9	157.8	-44.2
ナイジェリア	100.0	18.2	-81.8	イエメン	46.2	62.1	34.4
スーダン	87.0	104.5	20.1	イスラエル	39.8	63.3	59.0
ケニア	46.6	89.2	91.6	UAE	20.9	39.8	90.4
タンザニア	37.9	35.1	-7.4	レバノン	18.2	15.0	-17.6
南アフリカ	25.2	36.4	44.7	オマーン	14.3	36.7	157.5
セネガル	28.0	14.3	-48.9	サウジアラビア	52.0	191.1	267.5
合計	1,071.8	973.4	-9.2	合計	1,029.2	1,080.0	4.9

(注) 各年度の期間は7月から翌年2月

資料：現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

＜ウクライナ＞ 小麦の輸出量は前年度同期比 37.4%減の 1,133.7 万トン

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量(クリミア地域分を含む)は、前月予測からの変更はなく、21.0百万トンと、史上最高だった前年度(33.0百万トン)から36.4%減少、過去5年平均(27.9百万トン)に比べ24.8%減少する見込み。また、ウクライナ農業政策食料省2023年度第1回生産見通し(2023.3.21)によれば、2022/23年度の収穫量は20.5百万トンの見込み。

同省によれば、2023/24年度の冬小麦の播種済面積は、前年度に比べ16.7%減少の4.17百万ヘクタール。また、春小麦の播種面積は同30.7%増加の0.28百万ヘクタールの見込み。春小麦の播種面積の増加は、相対的に肥料等のコストがかさむとうもろこし等の作物からシフトしたとみられる。なお、2023/24年度の生産量は16.6百万トン(2022/23年度対比19.2%減)の見込み。

現地情報会社によれば、ウクライナ国立農業科学アカデミーは穀物全体の生産量減少の要因を①作付面積の減少、②資金不足、③肥料投入量の50～60%減少等としている。

冬小麦の生育状況は、2023年2月は温暖であったため、天候による作物への影響はなかった。今後、気温上昇の安定化で再生長が本格化するが、その時期は例年通り3月中旬以降とみられている。

【貿易状況・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度に比べ28.3%減少の13.5百万トンの見込み。「黒海穀物イニシアチブ」と陸上輸送等による輸出の継続から、前年度に比べ28.3%の減少に留まっている。

ウクライナ政府等によれば、2022/23年度の2022年7月～2023年2月のウクライナの小麦の輸出量は前年度同期比37.4%減の1,133.7万トン。この輸出量には、海上輸送に加え、陸路等での輸出分も含まれる。また、輸出先国は、トルコ(19.5%)、ルーマニア(16.2%)、スペイン(14.3%)の順。前年度に比べ、スペイン、ルーマニア、ポーランド等の一部のEU諸国向けが増加した。ウクライナの主要港湾の封鎖と輸出に制約がある一方、EU国境の鉄道インフラが整備されつつあることが背景にある。

また、黒海穀物イニシアチブ「国連共同調整センター」によれば、合意に基づく2022年8月から2023年2月までの黒海港湾からの小麦輸出量は671.2万トンで、輸出先国は、スペイン(24.5%)、トルコ(18.0%)、バングラデシュ(9.6%)の順。なお、国連、ウクライナ、ロシア、トルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意は、2023年3月19日以降延長された。延長期間は未決着(ウクライナは120日間延長、ロシアは60日間延長を主張)。

小麦－ウクライナ (主に冬小麦を栽培) (単位:百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23(22年7月～23年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	25.4	33.0	21.0 (25.2)	-	▲ 36.4
消費量	8.7	10.0	9.2 (12.7)	-	▲ 8.0
うち飼料用	2.6	4.0	4.0 (2.6)	-	-
輸 出 量	16.9	18.8	13.5 (14.0)	-	▲ 28.3
輸 入 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	-
期末在庫量	1.5	5.8	4.2 (4.5)	▲ 0.0	▲ 27.7
期末在庫率	5.9%	20.0%	18.4% (16.9%)	▲ 0.2	▲ 1.6
(参考)					
収穫面積(百万ha)	6.85	7.41	5.35 (6.6)	-	▲ 27.8
単収(t/ha)	3.71	4.45	3.93 (3.84)	-	▲ 11.7

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 March 2023)
IGC 「Grain Market Report」(16 February 2023)

写真:ウクライナの冬小麦(中央部ポルタバ州)

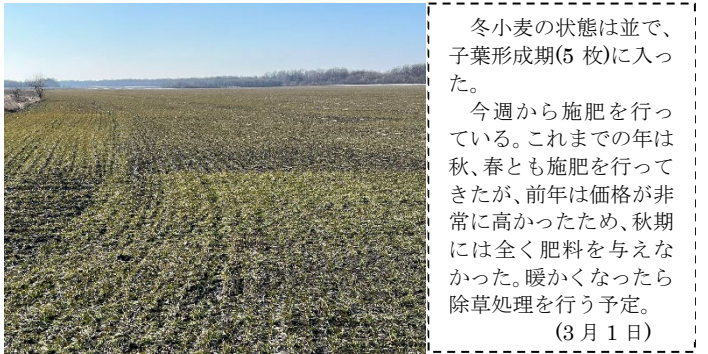


表:ウクライナ産小麦の輸出量と輸出先国

2022/23年度 (2022年7月～2023年2月)			2022/23年度 (2022年7月～2023年2月)			2021/22年度 (2021年7月～2022年2月)		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
トルコ	33.0	20.5	トルコ	221.3	19.5	エジプト	273.8	15.1
ルーマニア	27.4	17.1	ルーマニア	183.6	16.2	インドネシア	265.5	14.7
スペイン	24.0	14.9	スペイン	161.7	14.3	トルコ	178.7	9.9
バングラデシュ	20.0	12.4	ポーランド	79.7	7.0	パキスタン	146.9	8.1
ポーランド	12.4	7.7	バングラデシュ	60.5	5.3	サウジアラビア	75.1	4.1
タイ	0.7	0.4	イタリア	46.4	4.1	イエメン	64.7	3.6
サウジアラビア	0.6	0.4	エジプト	39.3	3.5	バングラデシュ	63.2	3.5
その他	42.6	26.5	その他	341.2	30.1	その他	743.4	41.0
計	160.7	100.0	計	1,133.7	100.0	計	1,811.3	100.0

資料: 現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

2 とうもろこし

(1) 国際的なとうもろこし需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2022/23 年度

生産量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・インド等で上方修正も、アルゼンチン等で下方修正され、前月から下方修正された。

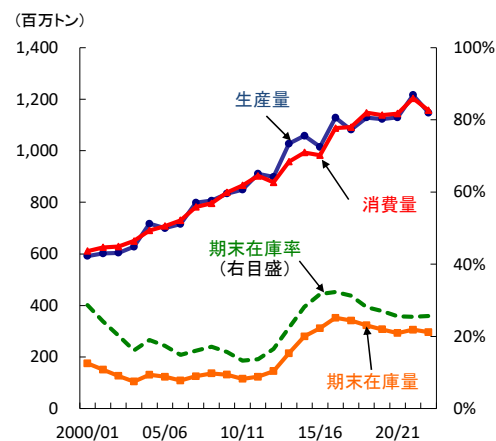
消費量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・インド等で上方修正も、イラン、マレーシア、エジプト等で下方修正され、前月から下方修正された。

輸出量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・インド、ウクライナ等で上方修正も、アルゼンチン、米国等で下方修正され、前月から下方修正された。

期末在庫量 前年度比 ↓ 前月比 ↑



資料：USDA「PS&D」（2023.3.8）をもとに農林水産省にて作成

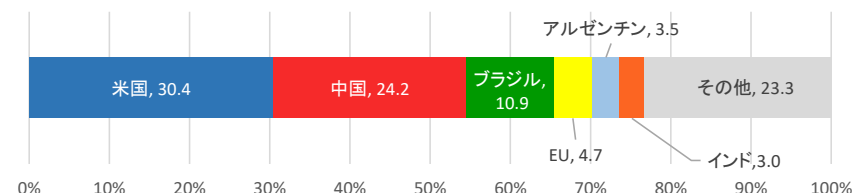
◎世界のとうもろこし需給

(単位：百万トン)

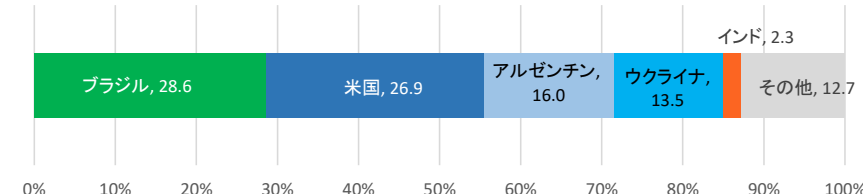
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測からの 変更	対前年度 増減率(%)
生産量	1,129.4	1,216.0	1,147.5	▲ 3.8	▲ 5.6
消費量	1,144.0	1,203.2	1,156.8	▲ 5.6	▲ 3.9
うち飼料用	723.9	749.4	727.0	▲ 2.2	▲ 3.0
輸出量	182.7	205.7	174.7	▲ 6.4	▲ 15.1
輸入量	184.9	184.5	174.5	▲ 2.5	▲ 5.4
期末在庫量	292.8	305.7	296.5	1.2	▲ 3.0
期末在庫率	25.6%	25.4%	25.6%	0.2	0.2

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(8 March 2023)

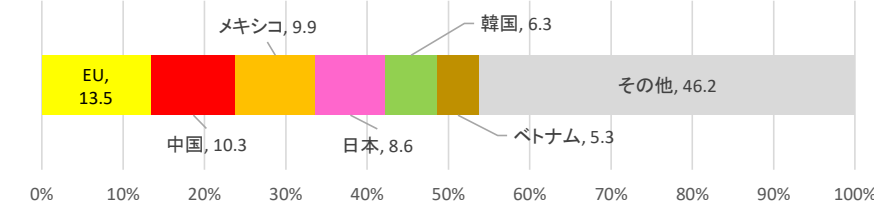
○ 2022/23 年度 世界のとうもろこしの生産量(1,147.5 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度 世界のとうもろこしの輸出量(174.7 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度 世界のとうもろこしの輸入量(174.5 百万トン) (単位：%)



（２）国別のとうもろこしの需給動向

＜ 米国 ＞ 生産量は収穫面積・単収の減少により減産、輸出減の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、夏季のコーンベルトの一部での高温・乾燥の影響から前年度より8.9%減の348.8百万トンの見込み。なお、収穫面積は、2008/09年度以来の低水準の見込み。

前年11月末時点で、収穫は例年より早いペースで終了した。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、生産量の減少に伴い、前年度より4.2%減の303.9百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、米国産の輸出価格は比較的下がっている中でも輸出ペースが低調なため、前月予測から1.9百万トン下方修正され、前年度より25.2%減の47.0百万トンの見込み。これは、2019/20年度（45.2百万トン）以来の低水準の見込み。輸出量減少の背景には、主要輸出先国である中国が輸入先の多角化を進めるため、2023年以降ブラジル産の輸入を本格化させていることも

あるとみられる。なお、2022/23年度における輸出成約は、2月23日（26週：約半年分）までで29.2百万トンと、前年度同期より39%減、過去5年平均を31%下回る水準。

USDAによれば、2023年輸出検証高(2023年1月5日～3月2日)は5.6百万トンであり、内訳はメキシコ（2.5百万トン）、日本（0.7百万トン）、中国（0.5百万トン）、コロンビア（0.4百万トン）の順である。

USDAによれば、2022/23年度の期末在庫量は、輸出量の下方向修正を受け、前月予測から1.9百万トン上方修正されたものの、前年度より2.6%減の34.1百万トンの見込み。

期末在庫率は9.7%で、前年度より上昇するものの、引き続き低水準の見込み。

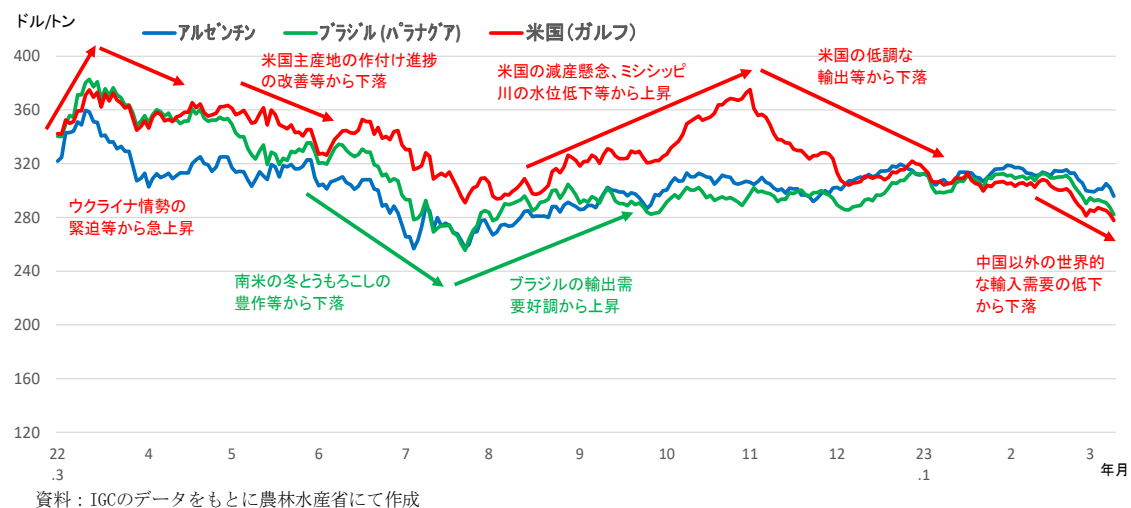
とうもろこし－米国

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年9月～23年8月)		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	358.5	382.9	348.8	-	▲ 8.9
消 費 量	306.7	317.1	303.9	-	▲ 4.2
うち飼料用	142.4	145.3	134.0	-	▲ 7.8
エタノール用等	127.7	135.3	133.4	-	▲ 1.4
輸 出 量	69.8	62.8	47.0	▲ 1.9	▲ 25.2
輸 入 量	0.6	0.6	1.3	-	104.8
期末在庫量	31.4	35.0	34.1	1.9	▲ 2.6
期末在庫率	8.3%	9.2%	9.7%	0.6	0.5
(参考)					
収穫面積(百万ha)	33.31	34.53	32.05	-	▲ 7.2
単収(t/ha)	10.76	11.09	10.88	-	▲ 1.9

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 March 2023)

図：米国、ブラジル、アルゼンチンのとうもろこし輸出価格（FOB）の推移



＜ ブラジル ＞ 生産量は史上最高、輸出量は世界第1位の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収の増加により、前年度より7.8%増の125.0百万トンで史上最高の見込み。

中西部での冬とうもろこしの作付けは、当初、降雨過多による大豆の収穫遅れを受けて遅れていたが、3月当初には平年並みのペースとなった。3月上旬から中旬にかけて南部リオ・グランデ・ド・スール州等の一部地域では高温・乾燥傾向が続いているものの、中西部やその他の地域では降雨により、冬とうもろこしの生育に恩恵となっている。

ブラジル食料供給公社（CONAB）月例報告（2023.3.9）によれば、収穫中の2022/23年度の夏とうもろこしの生産量は、前年度比6.9%増の26.8百万トンの見込み。一方、大豆収穫後の2月以降に作付けされる冬とうもろこしの生産量は、前年度比11.1%増の97.9百万トンの見込み。夏作・冬作の合計では前年度比10.2%増の124.7百万トンで史上最高の見込み。（P.23 大豆ーブラジルのクロップカレンダー参照）。

夏とうもろこしの収穫進捗率は、南部のリオ・グランデ・ド・スール州で3月16日現在、68%で過去5年平均（54%）より進んでいる。冬とうもろこしの作付進捗率は、中西部のマット・グロッソ州で3月17日現在98%、南部のパラナ州で3月13日現在61%となっている。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度より3.5%増の73.0百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度より3.1%増の50.0百万トンで史上最高となり、世界第1位の輸出国となる見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2023年1～2月の輸出量は844.7万トンで、前年同期（349.9万トン）と比べ2.4倍となっている。内訳は、1位が日本151.8万トン、2位が中国105.4万トン、3位が韓国90.4万トンの順。前年11月末以降、中国向け輸出が開始され、今後、輸出が本格化するとみられる。2月の輸出量は、227.6万トンで、前年同月（76.7万トン）と比べ、3.0倍となっている。

とうもろこしーブラジル

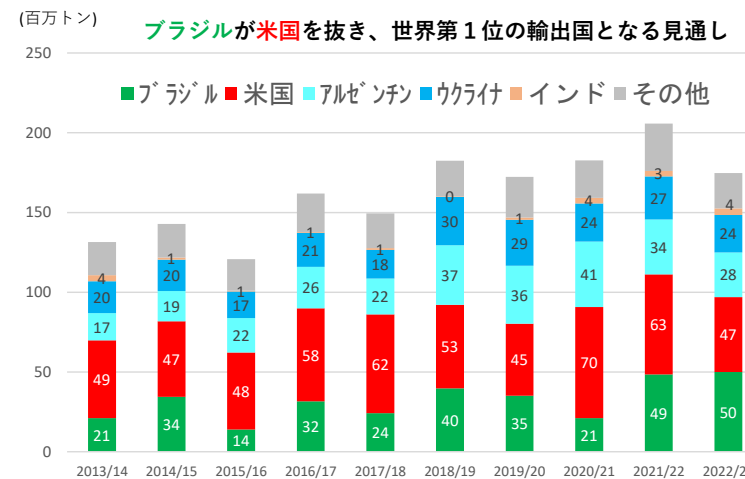
（大豆収穫後に栽培する冬とうもろこしが約8割、夏とうもろこしは約2割）

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (23年3月～24年2月)		
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	87.0	116.0	125.0 (123.1)	－	7.8
消 費 量	70.0	70.5	73.0 (74.4)	－	3.5
うち飼料用	59.5	59.5	61.5 (52.5)	－	3.4
輸 出 量	21.0	48.5	50.0 (48.0)	－	3.1
輸 入 量	2.9	2.6	1.3 (0.5)	－	▲ 50.0
期末在庫量	4.2	3.8	7.1 (5.9)	▲ 0.5	88.0
期末在庫率	4.6%	3.2%	5.7% (4.8%)	▲ 0.4	2.6
(参考)					
収穫面積(百万ha)	19.90	21.80	22.70 (21.80)	－	4.1
単収(t/ha)	4.37	5.32	5.51 (5.65)	－	3.6

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 March 2023)
IGC「Grain Market Report」(16 February 2023)

図：世界のとうもろこし輸出国の輸出量の推移



資料：USDA「PS&D」（2023.3.8）のデータをもとに農林水産省にて作成

＜ アルゼンチン ＞ 干ばつにより大幅減産見込み（輸出税継続）

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の生産量は、2 月から 3 月上旬の高温・乾燥により、作付面積の約 2/3 を占める出穂期の遅植えとうもろこしがコルドバ州やサンタフェ州など主産地で被害を受け、単収が下方修正され、前月予測から 7.0 百万トン下方修正となり、前年度より 19.2%減の 40.0 百万トンの見込み。生産量は、2017/18 年度（32.0 百万トン）以来の低水準となる見込み。

ブエノスアイレス穀物取引所週報（2023.3.16）によれば、作柄は、平年並みから良が 40%と前年度同期（80%）を大きく下回る。生産量は、長引く乾燥の影響で 36.0 百万トンと前年度（52.0 百万トン）から大幅に減少し、21 年ぶりの低水準の見通し。過去 60 年間で最悪の干ばつとも言われている。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度より 18.9%減の 12.0 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、生産量の下方修正に伴い、前月予測から 7.0 百万トン下方修正され、前年度より 18.6%減の 28.0 百万トンの見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2023 年 1 月の輸出量は 100.7 万トンで、前年同月（184.9 万トン）より 45.5%減。内訳は、1 位がペルー 16.0 万トン、2 位がマレーシア 14.5 万トン、3 位がコロンビア 11.0 万トンの順。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、2019 年 12 月 14 日、輸出税を約 7%から 12%へ引き上げ、継続している。

2021 年 12 月 17 日、アルゼンチン農牧水産大臣は、とうもろこしと小麦の輸出に関し、国内向け穀物供給不足の回避と食料品価格の上昇を抑制するため、輸出上限数量を設定することを表明。3 月中旬現在、とうもろこしの輸出上限数量は 2021/22 年度 36 百万トン、2022/23 年度 20 百万トンに設定されている。

なお、アルゼンチン政府は、今般の干ばつ対策として、農業関係者に対し、融資や減税、割引手形を発行するなどの救済施策を公表した。

とうもろこしーアルゼンチン

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (23年3月～24年2月)			
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	52.0	49.5	40.0 (53.5)	▲ 7.0	▲ 19.2	
消 費 量	13.5	14.8	12.0 (20.3)	－	▲ 18.9	
うち飼料用	9.5	10.9	8.0 (15.5)	－	▲ 26.6	
輸 出 量	40.9	34.4	28.0 (34.9)	▲ 7.0	▲ 18.6	
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.4)	－	－	
期末在庫量	1.2	1.5	1.5 (2.2)	－	－	
期末在庫率	2.2%	3.0%	3.7% (4.0%)	0.6	0.7	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	6.55	7.10	6.70 (8.00)	－	▲ 5.6	
単収(t/ha)	7.94	6.97	5.97 (6.69)	▲ 1.04	▲ 14.3	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 March 2023)
IGC 「Grain Market Report」(16 February 2023)

写真：北部サンタフェ州の早植えとうもろこしの圃場風景 （2 月 26 日撮影）

前年 9 月上旬に作付け。生育期間を通して干ばつの影響を受け続けている。先端部分は成長していない。収穫は 3 月下旬の予定。



< 中国 > 生産量、消費量ともに史上最高、輸入量減少の見通し

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の実生産量は、前月予測からの変更はなく、主産地の黒竜江省等東北地区及び華北平原で生育期を通じて良好な天候に恵まれたことから、単収の増加により、前年度より 1.7%増の 277.2 百万トンで史上最高の見込み。

前年 11 月上旬時点で、春とうもろこし、夏とうもろこしの収穫は既に終了。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、旺盛な飼料用消費から前年度より 2.1%増の 297.0 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、国内産の豊作等を受け、前年度より 17.7%減の 18.0 百万トンの見込み。

中国の貿易統計によれば、2022 年 1～12 月の輸入量は 20.6 百万トンで、前年同期比で 27.3%減。内訳は、米国産 14.9 百万トン（72%）、ウクライナ産 5.3 百万トン（26%）。前年 5 月以降、2021 年同月に比べウクライナ産の輸入が大幅に減少している。ただし、前年 12 月のウクライナ産の輸入量は 28.6 万トンと、2021 年同月（92.0 万トン）には及ばないものの、前年 8 月以降の黒海経由の輸出再開を受けて、回復傾向にある。（右図、P.14 ウクライナ参照）

なお、前年 11 月末に COFCO（中糧集団）が買い付けた 6.8 万トンのブラジル産とうもろこしを積んだばら積船が、1 月上旬に広東省の港に到着した。今後、ブラジル産の輸入を増加させ、米国産への輸入依存を減らす意向とみられる。他の穀物も含めた今後の中国の輸入動向に注視が必要。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2023 年 1 月号」によると、1 月の国内流通価格は、新型コロナ防疫政策の緩和後、春節を受け、多くの買付業者が次々と買付を中止し、市場の売買が低迷したこと、3,040 元/トンと前月（3,020 元/トン）から概ね安定した。今後は、とうもろこし産業の消費が回復すると予想され、飼料の消費も高止まりしている一方、農家の販売進捗は遅く、短期的には国内価格は高値を維持しながら推移するとみられる。また、1 月の輸入価格は、2,820 元/トンと前月（2,900 元/トン）から下落した。

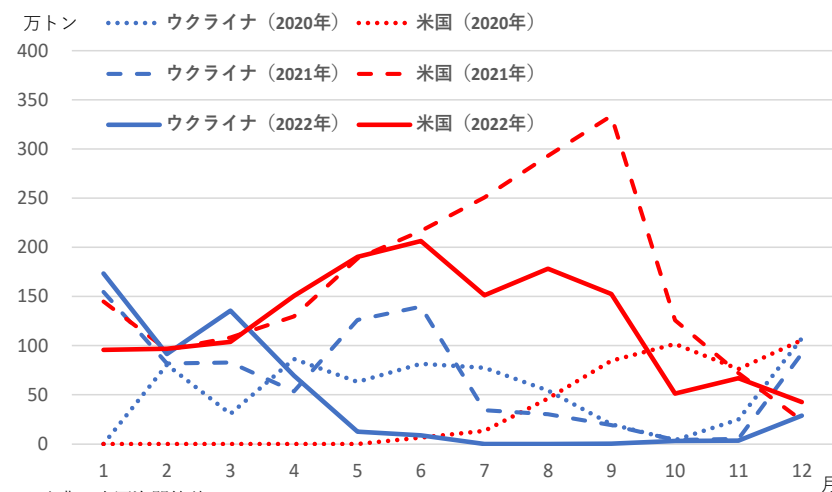
とうもろこし—中国

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率 (%)	
生 産 量	260.7	272.6	277.2 (277.2)	-	1.7	
消 費 量	285.0	291.0	297.0 (308.4)	-	2.1	
うち飼料用	203.0	209.0	216.0 (207.0)	-	3.3	
輸 出 量	0.0	0.0	0.0 (0.1)	-	-	
輸 入 量	29.5	21.9	18.0 (19.0)	-	▲ 17.7	
期末在庫量	205.7	209.1	207.3 (176.0)	-	▲ 0.9	
期末在庫率	72.2%	71.9%	69.8% (57.0%)	-	▲ 2.1	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	41.26	43.32	43.07 (43.00)	-	▲ 0.6	
単収(t/ha)	6.32	6.29	6.44 (6.45)	-	2.4	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 March 2023)
IGC 「Grain Market Report」(16 February 2023)

図：中国におけるウクライナ、米国産とうもろこしの輸入状況



出典：中国海関統計

注：2020年1月分と2月分は合計で公表されたため、便宜上1/2で按分

< ウクライナ > ロシアによる侵攻により、輸出量は前年度より 13%減

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫期の前年 10 月～11 月の記録的な降雨に加え、労働力不足、燃料費の高騰、輸送や貯蔵の問題といったロシアによる侵攻の影響を受け、主産地の収穫が著しく遅れたこと、一部のとうもろこしが刈り残され、圃場に放置されていることなどから、収穫面積及び単収が減少し、史上最高の生産量となった前年度より 35.9%減の 27.0 百万トンの見込み。

ウクライナ農業政策食料省によれば、3 月 9 日時点で、収穫済面積は 4.0 百万ヘクタール、収穫進捗率は 96%となっている。

また、ウクライナ農業政策食料省 2023 年度第 1 回生産見通し（2023.3.21）によれば、2023/24 年度の作付面積は 3.6 百万ヘクタール（2022/23 年度比 11.1%減）、生産量は 21.7 百万トン（2022/23 年度 25.6 百万トンから 15.2%減）と更なる減産の見通し。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度より 43.1%減の 6.2 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、EU 及び中国向けの輸出増加を受けて前月予測から 1.0 百万トン上方修正されたものの、前年度より 12.9%減の 23.5 百万トンの見込み。

ウクライナ政府等によれば、2022/23 年度（2022 年 10 月～2023 年 9 月）のうち、2022 年 10 月～2023 年 2 月の輸出量は 1,379 万トンで、前年度同期（1,790 万トン）に比べ 22.9%減。輸出先国は、中国、ルーマニア、スペイン、ハンガリー、イタリア、ポーランドの順となっている。なお、この輸出量には、海上輸送に加え、陸路等での輸出分も含まれる。

黒海穀物イニシアチブ「国連共同調整センター」によれば、輸出が再開された前年 8 月 1 日～2 月 28 日の黒海港湾からのとうもろこし輸出量は 1,102 万トンであり、輸出先国は、中国（297 万トン）、スペイン（203 万トン）、イタリア（117 万トン）、オランダ（92 万トン）の順となっている。

なお、国連、ウクライナ、ロシア、トルコの 4 者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意は、2023 年 3 月 19 日以降延長された。延長期間は未決着（ウクライナは 120 日間延長、ロシアは 60 日間延長を主張）。

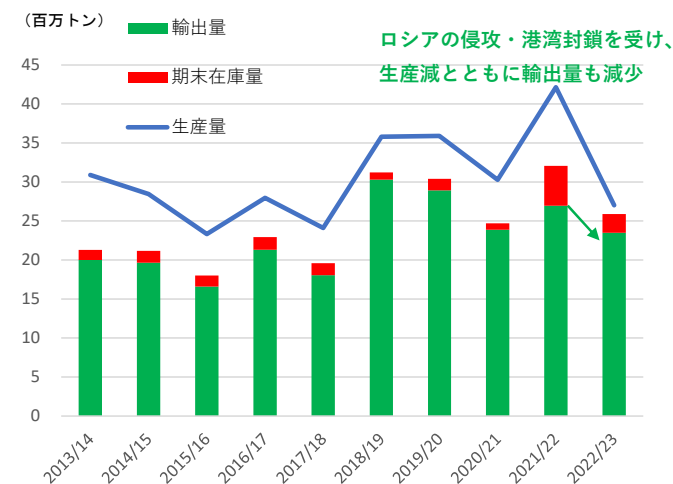
とうもろこしーウクライナ

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	30.3	42.1	27.0 (25.5)	-	▲ 35.9	
消費量	7.1	10.9	6.2 (8.9)	-	▲ 43.1	
うち飼料用	5.9	9.7	5.0 (5.5)	-	▲ 48.5	
輸出量	23.9	27.0	23.5 (19.0)	1.0	▲ 12.9	
輸入量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	▲ 100.0	
期末在庫量	0.8	5.1	2.4 (4.5)	▲ 1.0	▲ 53.0	
期末在庫率	2.7%	13.4%	8.0% (16.3%)	▲ 3.8	▲ 5.4	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	5.40	5.49	4.00 (4.00)	-	▲ 27.1	
単収(t/ha)	5.62	7.68	6.75 (6.38)	-	▲ 12.1	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 March 2023)
IGC 「Grain Market Report」(16 February 2023)

図：とうもろこしの生産量、輸出量、期末在庫量の推移



資料：USDA 「PS&D」 (2023. 3. 8) をもとに農林水産省にて作成。

3 コメ

(1) 国際的なコメ需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

2022/23 年度

生産量

前年度比



前月比



- ・ブラジル等で下方修正も、インド等で上方修正され、前月から上方修正された。

消費量

前年度比



前月比



- ・ブラジル等で下方修正も、インド、ベトナム等で上方修正され、前月から上方修正され、史上最高の見込み。

輸出量

前年度比



前月比



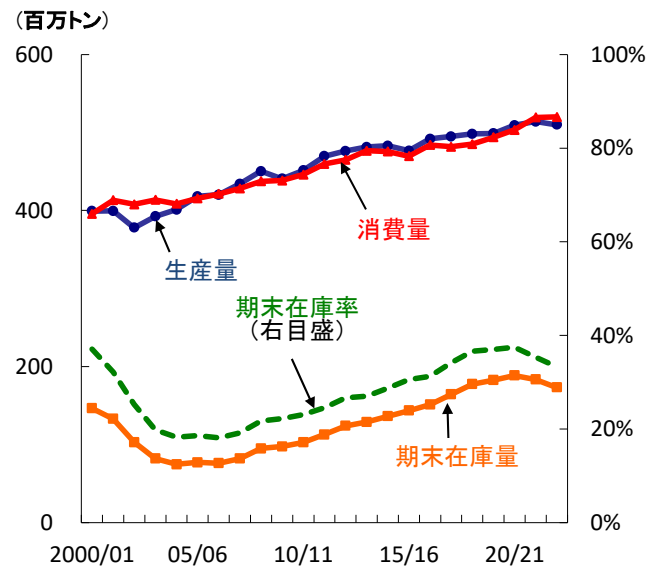
- ・米国等で下方修正も、インド等で上方修正され、前月から上方修正された。

期末在庫量

前年度比



前月比



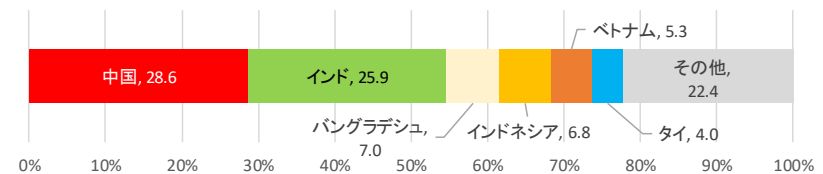
◎世界のコメ需給

（単位：百万精米トン）

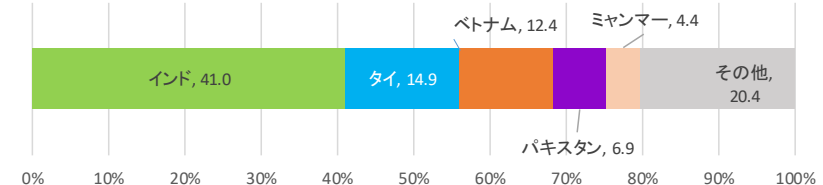
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	509.3	514.0	509.8	6.9	▲ 0.8
消 費 量	503.4	519.2	520.0	2.8	0.1
輸 出 量	51.2	56.8	54.9	0.9	▲ 3.3
輸 入 量	46.5	54.6	53.7	0.6	▲ 1.7
期末在庫量	188.7	183.4	173.3	4.2	▲ 5.5
期末在庫率	37.5%	35.3%	33.3%	0.6	▲ 2.0

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」（8 March, 2023）

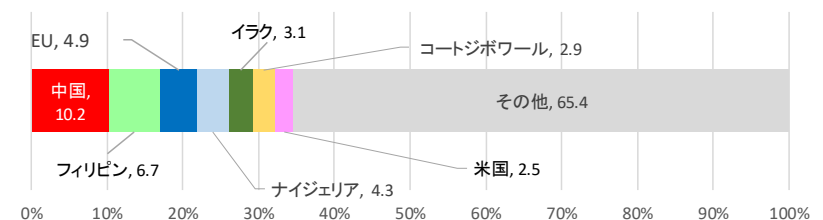
○ 2022/23年度 世界のコメの生産量(509.8百万トン)（単位：%）



○ 2022/23年度 世界のコメの輸出量(54.9百万トン)（単位：%）



○ 2022/23年度 世界のコメの輸入量(53.7百万トン)（単位：%）



(2) 国別のコメの需給動向

< 米国 > カリフォルニア州の豪雨・豪雪で灌漑用水の貯水水準が上昇

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、長粒種、中・短粒種とも収穫面積及び単収の減少により、対前年度比 16.3%減の 5.1 百万トンと、1993/94 年度以来の低水準となる見込み。収穫面積は、作付けが長粒種から収益性がよい大豆等へシフトしたことや、厳しい干ばつの長期化による中・短粒種の灌漑用水不足等で、対前年度比で 12.9%減少し、1983/84 年度以来の低水準となる見込み。

なお、USDA「Weekly Weather and Crop Bulletin」(2023.3.14, 21)等によると、灌漑用水不足や取水制限が続いていたカリフォルニア州(中・短粒種の主産地)では、前年 12 月末から本年 1 月中旬に加え、2 月下旬にも豪雨・豪雪があり、カリフォルニア州の灌漑用水の供給源となるシエラネバダ山脈の積雪量や河川の流水量が、3 月上旬時点で 1991~2020 年の平均を大きく上回る水準(150%以上)となっている(右図参照)。今後の作付けに向けて一定量の灌漑用水が供給されるとみられる。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、生産量の減少による供給量減少から、対前年度比 2.7%減の 4.7 百万トンの見込み。

2022/23 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比 10.8%増の 1.3 百万トンと、史上最高の見込み。特に、中・短粒種の減産に伴い、同種の輸入量が 27%増と大幅に増加している。

2022/23 年度の輸出量は、輸出価格高騰により、長粒種は南米諸国に比べ輸出競争力が劣ること、及び中・短粒種は輸出需要が減少していることから、前月予測から 0.1 百万トン下方修正され、対前年度比 28.4%減の 1.9 百万トンと、1985/86 年度以来の低水準の見込み。

USDA「Grain: World Markets and Trade」(2023.3.8)によれば、長粒種の価格は供給量の減少によりここ数か月間高止まりしており、3 月 7 日までの週のイラク向け長粒種(2 等、碎米 4%混入)は 760 ドル/トンと、前月に引き続き、2008 年 10 月初旬(772 ドル/トン)以来の高値となっている。なお中粒種(地中海向けカリフォルニア米(1 等、碎米 4%混入)の価格情報の公表は、今月はなかった。(右図参照)

コメー米国

主に長粒種はミシシッピ川沿いで栽培、中・短粒種のシェアは 1/4
米国のコメ生産に占めるカリフォルニア州のシェアは約 2 割

(単位:百万精米トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年 8 月~23年 7 月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	7.2	6.1	5.1	-	▲ 16.3
消費量	4.9	4.8	4.7	-	▲ 2.7
輸出量	3.0	2.6	1.9	▲ 0.1	▲ 28.4
輸入量	1.1	1.2	1.3	-	10.8
期末在庫量	1.4	1.3	1.2	0.1	▲ 8.7
期末在庫率	17.8%	17.0%	17.6%	1.8	0.6

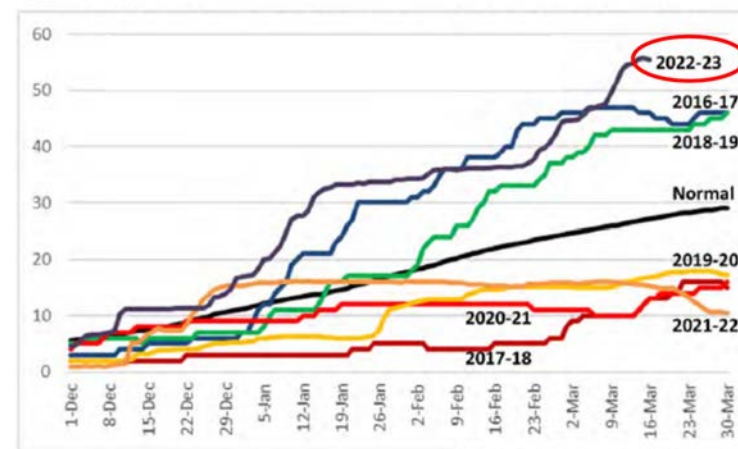
(参考)

収穫面積(百万ha)	1.21	1.01	0.88	-	▲ 12.9
単収(もみt/ha)	8.54	8.64	8.28	-	▲ 4.2

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 March, 2023)

図:カリフォルニア州シエラネバダ山脈の年度別降雪量

(単位:インチ)



資料: USDA「Weekly Weather and Crop Bulletin」(2023.3.21)より。

< インド > 2022/23 年度の生産量・消費量とも史上最高の見込み

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23 年度の実生産量は、収穫面積と単収が上方修正されたことから、前月予測から 7.0 百万トン上方修正され、対前年度比 2.0%増の 132.0 百万トンと史上最高の見込み。インドのコメ生産量の 30%を占めるラビ米の作付けが前年度より 25%増加し、モンスーン期の降雨の遅れによるカリフ米の減産分が相殺される見通し。

ラビ米の生産地域の大部分は、土壌水分が良好で肥料も十分であったことから、前年 10 月に例年通り作付けが行われた。ラビ米は主に灌漑栽培されており、本年 2 月末時点の灌漑用水の貯水率は 8 割程度となっている。ラビ米は平年以上の作柄とみられる。収穫は 3 月に始まり、4 月末には終了する予定。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23 年度の消費量は、史上最高となった生産量の上方修正を受け、前月予測から 2.5 百万トン上方修正され、前年度に引き続き政府の低所得世帯向け食料配給プログラム（約 8 億人が対象）向けにコメを供給していることもあり、前年度より 0.5%増の 111.0 百万トンと、史上最高となる見込み。

2022/23 年度の輸出量は、輸出規制は行われているものの、引き続き他のアジア諸国より価格競争力があること等から、前月予測から 1.0 百万トン上方修正され、対前年度比 2.1%増の 22.5 百万トンの見込み。

なお、インドは、カリフ米の生産減少による国内価格高騰を防止する観点から、前年 9 月 9 日に輸出規制を発動（碎米（100%）の輸出禁止及びバスマティ米・パーボイルド米以外のコメへの輸出税課税（20%））。ただし、依然として世界の輸出量の 40%を占め、世界第 1 位の輸出国となる見込み。

同「Grain: World Markets and Trade」（2023.3.8）によれば、インド産米（碎米 5%混入）の 3 月 7 日までの週の輸出価格は 435 ドル/トンと、前月から横ばいで、依然アジア主要輸出国の中で最低価格水準となっている（P.20 の「長粒種の FOB 価格の推移」を参照）。

2022/23 年度の期末在庫量は、生産量の上方修正に伴い前月予測から 3.5 百万トン上方修正されたものの、対前年度比 4.4%減の 32.5 百万トンの見込み。

コメ・インド

雨季をカリフ、乾季をラビと呼ぶ。北部はカリフ・ラビ（小麦）の二毛作、南部はカリフ・ラビの二期作。主にインディカを栽培

（単位：百万精米トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年 9 月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	124.4	129.5	132.0 (123.8)	7.0	2.0	
消 費 量	101.1	110.5	111.0 (107.3)	2.5	0.5	
輸 出 量	20.2	22.0	22.5 (19.7)	1.0	2.1	
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	-	
期末在庫量	37.0	34.0	32.5 (29.7)	3.5	▲ 4.4	
期末在庫率	30.5%	25.7%	24.3% (23.4%)	2.0	▲ 1.3	

(参考)

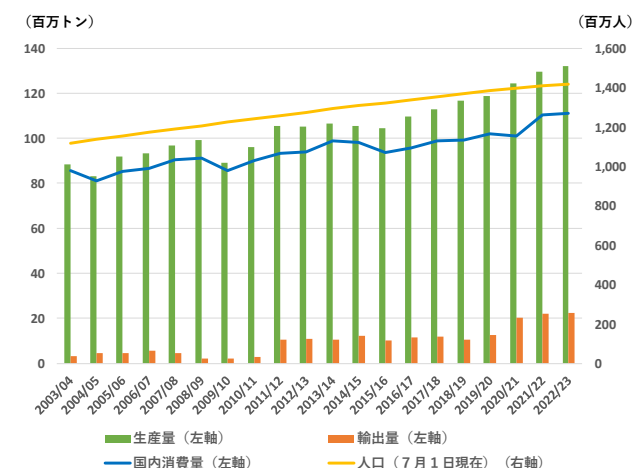
収穫面積(百万ha)	45.77	46.28	47.00 (45.00)	1.50	1.6
単収(もみt/ha)	4.08	4.20	4.21 (2.75)	0.09	0.2

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、

「World Agricultural Production」(8 March, 2023)

IGC「Grain Market Report」(16 February 2023) (単収は精米t/ha)

図：インドのコメ生産量・消費量・輸出量と人口の推移



資料：USDA「PS&D」(2023.3.8)及び国連「World Population Prospects 2022」
をもとに農林水産省にて作成。なお 2022 年の人口は推計値。

< 中国 > 2022/23 年度の輸入量は史上最高となった前年度より減少の見込み

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比 2.0%減の 146.0 百万トンと、2013/14 年度以来の低水準の見込み。

例年どおりであれば、黒竜江省で 4 月から育苗作業が開始される見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用米の消費量の減少から、対前年度比 0.9%減の 155.0 百万トンとなる見込み。なお、中国国家糧食及び物資備蓄局の推計では、ここ 3 年ほど、毎年 30 百万トン（もみベース）程度 of 古米が飼料用として仕向けられているとのこと。

2022/23 年度の輸入量は、輸入ペースの予想以上の増加により、前月予測から 0.3 百万トン上方修正されたものの、碎米の主要輸入先国であるパキスタンの洪水による生産減少見通しやインドのコメ輸出規制により、史上最高となった対前年度比 7.6%減の 5.5 百万トンの見込み。中国はこれまで、とうもろこし等飼料用穀物の価格高騰を背景に、飼料用等として低価格の碎米をインド等から輸入してきた。

中国海関統計によれば、2022 年の年間輸入量は、前年の 492.6 万トンから 25.0%増加し、615.6 万トンとなった。輸入先はインドが 218.0 万トンと最も多く、対前年同期比で 99.9%の増加。次いでパキスタンが 119.7 万トン（対前年同期比 24.5%の増加）となっている。なお、11 月以降、インドの輸出規制やパキスタンの洪水による減産の影響から、輸入量は 2020 年及び 2021 年を下回った。

USDAによれば、2022 年に、コメの関税割当て制度が設けられてから初めて、割当数量（5.32 百万トン）を超える輸入となった。

コメー中国

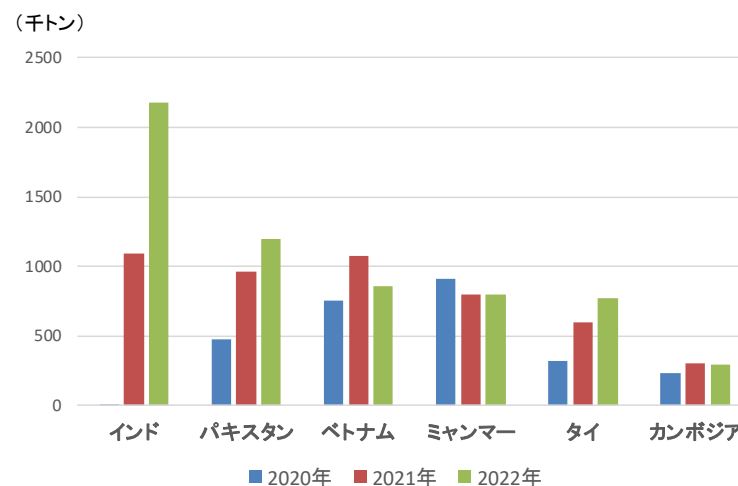
北部で一期作、南部で二期作。ジャポニカ(粳)米は東北地区、江蘇省等で栽培、生産シェアは3割程度

(単位：百万精米トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年7月～23年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	148.3	149.0	146.0 (146.0)	-	▲ 2.0
消 費 量	150.3	156.4	155.0 (151.1)	-	▲ 0.9
輸 出 量	2.2	2.1	2.2 (2.2)	-	5.8
輸 入 量	4.2	6.0	5.5 (4.3)	0.3	▲ 7.6
期末在庫量	116.5	113.0	107.3 (104.9)	0.3	▲ 5.0
期末在庫率	76.4%	71.3%	68.3% (68.4%)	0.2	▲ 3.0
(参考)					
収穫面積(百万ha)	30.08	29.92	29.45 (30.03)	-	▲ 1.6
単収(もみt/ha)	7.04	7.11	7.08 (4.86)	-	▲ 0.4

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 March, 2023)
IGC「Grain Market Report」(16 February 2023) (単収は精米t/ha)

図： 中国のコメ輸入先国の変化



出典：中国海関統計

< タイ > 乾季米（全作付面積の約 2 割）は 43%が収穫済み

【生育・生産動向】USDA によれば、2021/22 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、良好な天候と十分な降雨により、2020/21 年度比 5.3%増の 19.9 百万トンの見込み。

2022/23 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、作付面積・単収ともに増加することが見込まれることから、対前年度比 1.6%増の 20.2 百万トンの見込み。なお、単収の増加は乾季にもかかわらず、十分な降雨による潤沢な灌漑用水が供給されたことによる。また、作付面積の増加の背景には、農家出荷価格の上昇が農家の作付け意欲を刺激していることもあるとみられる。

アセアン食料安全保障情報システム（2023.3）によると、乾季米は登熟期および収穫期にあり、作付面積の 43%がすでに収穫された。前年度同時期より灌漑用水が潤沢なことから、乾季米の作付面積は予定面積より 35%増加している。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比 6.8%増の 8.2 百万トンとなる見込み。インドに次ぐ世界第 2 位のコメ輸出国となる見通し。

2021/22 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、2020/21 年度比 22.1%増の 7.7 百万トンの見込み。

タイ米輸出業者協会によれば、2023 年 1 月の輸出量は、前年同月の 46.0 万トンから 75.2%増加し、80.6 万トンとなった。主な輸出先はインドネシアが 17.0 万トン（前年同月比 932 倍）、バングラデシュが 10.7 万トン（前年同月は輸入なし）、イラクが 77.6 万トン（同 1.8 倍）、南アフリカが 6.0 万トン（同 2.4 倍）、日本が 5.9 万トン（同 1.2 倍）。背景として、インドネシアが政府備蓄の不足に対処するため輸入を拡大していること、イラクが検疫問題で 7 年間停止していたタイ産米の輸入を 2022 年に再開したことなどがあるとみられる。なお、タイ政府は 3 月 22 日、世界経済が回復途上にあること、タイ国内の収穫量増加から、2023 年の輸出目標値を従来の 7.5 百万トンから 8.0 百万トンに引き上げた。ただし、不安定な為替相場が懸案材料とのこと。

USDA 「Grain: World Markets and Trade」(2023.3.8) によれば、3 月 7 日までの週のタイ産米（長粒、2 等精米）の輸出価格は、パーツ安や需要の軟化により前月から 34 ドル下落し、473 ドル/トンとなった（P.20 の「長粒種の FOB 価格の推移」を参照）。

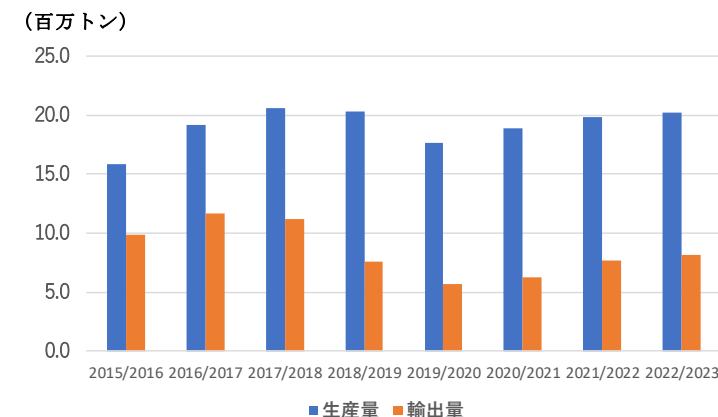
コメ・タイ

夏期の雨季作と冬期の乾季作で行われる。主にインディカ米を栽培

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (23 年 1 月～23 年 12 月)		
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率 (%)
生 産 量	18.9	19.9	20.2 (20.2)	-	1.6
消 費 量	12.7	12.8	13.0 (12.4)	-	1.6
輸 出 量	6.3	7.7	8.2 (8.1)	-	6.8
輸 入 量	0.2	0.1	0.2 (0.3)	-	15.4
期末在庫量	4.0	3.5	2.7 (6.7)	-	▲ 24.3
期末在庫率	21.0%	17.1%	12.5% (32.7%)	-	▲ 4.6
(参考)					
収穫面積(百万ha)	10.51	10.70	10.85 (10.85)	-	1.4
単収(もみt/ha)	2.72	2.81	2.82 (1.86)	-	0.4

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 March, 2023)
IGC 「Grain Market Report」(16 February 2023)（単収は精米t/ha）

図：タイの生産量・輸出量の推移



資料：USDA 「PS&D」(2023.3.8)をもとに農林水産省にて作成

< ベトナム > 冬春作の生育・収穫が進展

【生育・生産動向】USDA によれば、2022/23 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度比 0.9%増の 27.0 百万トンの見込み。

2021/22 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、2020/21 年度比 2.2%減の 26.8 百万トンの見込み。なお、2021/22 年度は、全ての作期で、主として肥料高騰や高収益作物（果物・野菜・養殖）への転換等により、収穫面積が減少した。

なお、アセアン食料安全保障情報システム（2023.3）によると、北部では乾季米（冬春作）が生育期にある。作付済み面積は 82.0 万ヘクタールで、灌漑用水が十分なことから生育状況は良好である。南部では、乾季米（冬春作）は収穫期にある。作付済み面積（187.0 万ヘクタール）に対し、収穫済み面積は現時点で 29.0 万ヘクタール（進捗率 15.5%）となっている。霧が多く、また一部地域で洪水の水が引かず病害虫が発生したことから、単収は 1 ヘクタール当たり 6.5 トンと、前年度より低くなるとみられる。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2021/22 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、2020/21 年度比 12.7%増の 7.1 百万トンの見込み。

2022/23 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度比 4.2%減の 6.8 百万トンの見込み。

ベトナム税関総局によれば、2023 年 1 月の輸出量は 35.9 万トンで、上位からフィリピン（13.0 万トン）、インドネシア（8.6 万トン）、中国（4.7 万トン）、コートジボワール（3.1 万トン）となっている。うち、ジャポニカ米は 0.6 万トンと 1.7%を占める。

USDA 「Grain: World Markets and Trade」(2023.3.8) によれば、ベトナム産米（長粒種、5%碎米混入）の 3 月 7 日までの週の価格は、新穀の供給が十分なことから、前月の価格から 49 ドル/トン下落して 460 ドル/トンとなった。

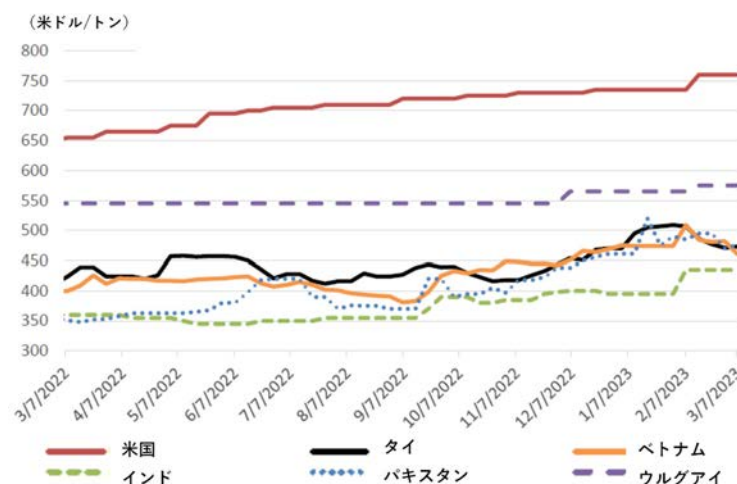
コメベトナム

北部で二期作、南部で二期作・三期作。主に長粒種、一部で短粒種も栽培

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (23年1月～23年12月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	27.4	26.8	27.0 (28.3)	-	0.9	
消費量	21.5	21.5	21.6 (22.5)	0.1	0.2	
輸出量	6.3	7.1	6.8 (7.2)	-	▲ 4.2	
輸入量	1.8	1.5	1.1 (1.1)	0.1	▲ 26.7	
期末在庫量	2.6	2.3	2.1 (3.1)	0.1	▲ 10.8	
期末在庫率	9.5%	8.1%	7.3% (10.4%)	0.2	▲ 0.8	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	7.31	7.19	7.17 (7.22)	-	▲ 0.3	
単収(もみt/ha)	6.00	5.96	6.03 (3.92)	-	1.2	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 March, 2023)
IGC 「Grain Market Report」(16 February 2023) (単収は精米t/ha)

図：長粒種の FOB 価格の推移



資料：USDA 「Grain : World Markets and Trade」(2023.3.8) より。

Ⅱ 油糧種子 大豆

(1) 国際的な大豆需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2022/23 年度

生産量 前年度比  前月比 

・アルゼンチン等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

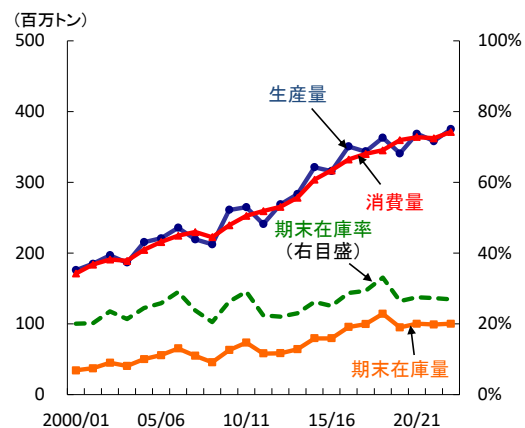
消費量 前年度比  前月比 

・アルゼンチン、中国等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比  前月比 

・アルゼンチン等で下方修正も、ブラジル、米国等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比  前月比 



資料：USDA「PS&D」（2023.3.8）をもとに農林水産省で作成

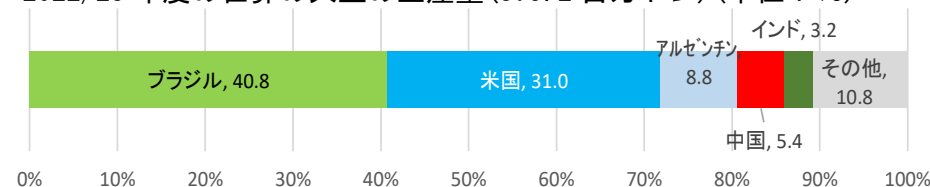
◎世界の大豆需給

（単位：百万トン）

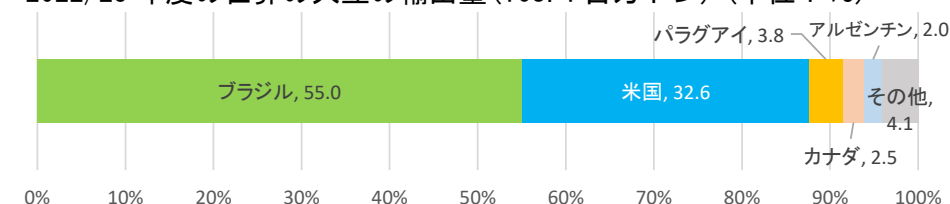
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測からの 変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	368.5	358.1	375.2	▲ 7.9	4.7
消 費 量	364.0	362.3	371.1	▲ 5.3	2.4
うち搾油用	316.0	313.0	320.0	▲ 3.9	2.3
輸 出 量	165.0	154.0	168.4	0.9	9.4
輸 入 量	165.6	157.1	165.4	1.3	5.3
期末在庫量	100.0	99.0	100.0	▲ 2.0	1.0
期末在庫率	27.5%	27.3%	26.9%	▲ 0.2	▲ 0.4

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」（8 March 2023）

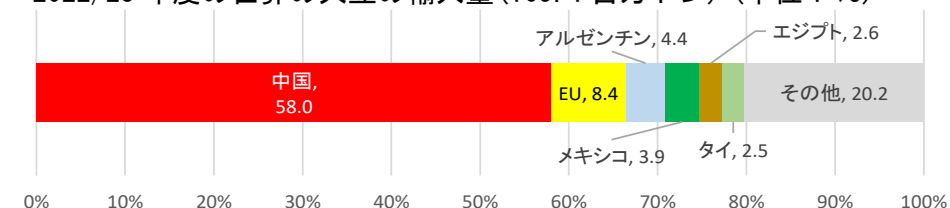
○ 2022/23 年度の世界の大豆の生産量 (375.2 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度の世界の大豆の輸出量 (168.4 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度の世界の大豆の輸入量 (165.4 百万トン) (単位：%)



（２）国別の大豆の需給動向

＜ 米国 ＞ 生産量は減産、輸出も減少の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、夏季のコーンベルトの一部での高温・乾燥の影響から主に単収の減少により、前年度より4.2%減の116.4百万トンの見通し。

前年11月中旬時点で、収穫は例年より早いペースで終了した。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の実消費量は、国内大豆粕需要減少を受けた搾油量の減少から、前月予測から0.3百万トン下方修正されたものの、前年度より1.5%増の63.7百万トンで史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の実輸出量は、ブラジルの降雨による大豆の収穫遅れを受け、2月の輸出量が予想以上のペースであったことから前月予測から0.7百万トン上方修正されたものの、生産量の減少、ブラジルの輸出拡大等を背景に、米国の輸出競争力が弱くなっており、前年度より6.6%減の54.8百万トンの見込み。

USDAによれば、2023年輸出検証高（2023年1月5日～3月2日）は、13.4百万トンであり、内訳は中国（8.6百万トン）、メキシコ（1.0百万トン）、ドイツ（0.6百万トン）、イタリア（0.5百万トン）、インドネシア（0.4百万トン）、日本（0.4百万トン）の順。

USDAによれば、2022/23年度の期末在庫量は、輸出量の上方修正等を受け、前月予測から0.4百万トン下方修正され、前年度より23.4%減の5.7百万トンの見込み。

なお、期末在庫率は4.8%で、前年度を下回っており、2013/14年度（2.6%）以来の低水準の見込み。

米国の輸出価格は、前年12月以降、収穫期を迎えている豊作のブラジル産に比べ割高で推移している。（右図参照）

大豆－米国

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23（22年9月～23年8月）		
			予測値	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生 産 量	114.8	121.5	116.4	－	▲ 4.2
消 費 量	60.9	62.8	63.7	▲ 0.3	1.5
うち搾油用	58.3	60.0	60.4	▲ 0.3	0.7
輸 出 量	61.7	58.7	54.8	0.7	▲ 6.6
輸 入 量	0.5	0.4	0.4	－	▲ 4.7
期末在庫量	7.0	7.5	5.7	▲ 0.4	▲ 23.4
期末在庫率	5.7%	6.1%	4.8%	▲ 0.4	▲ 1.3
（参考）					
収穫面積(百万ha)	33.43	34.93	34.94	－	0.0
単収(t/ha)	3.43	3.48	3.33	－	▲ 4.3

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」（8 March 2023）

図：米国、ブラジル、アルゼンチン大豆輸出価格（FOB）の推移



資料：IGCのデータをもとに農林水産省にて作成

＜ ブラジル ＞ 生産量、輸出量ともに史上最高の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、前年度より18.1%増の153.0百万トンと史上最高の見込み。なお、収穫面積は、特に中西部のマト・グロッソ州（最大生産州）、ゴイアス州等で増加見込み。

また、ブラジル食料供給公社(CONAB)月例報告（2023.3.9）によれば、2022/23年度の実産量は、中西部の主産地の天候に恵まれ、南部の州を中心に深刻な高温・乾燥の影響を受けた前年度より20.6%増の151.4百万トンで史上最高の見込み。

3月上旬から中旬にかけて、南部リオ・グランデ・ド・スール州等の一部地域では高温・乾燥傾向が続いている一方、中西部の大豆産地では過度な降雨によって遅れていた収穫作業が降雨量の減少により改善している。収穫進捗率は、中西部のマト・グロッソ州で3月17日現在、97%で、過去5年平均（96%）と同水準となっている。南部のパラナ州で3月13日現在、収穫進捗率は48%。南部のリオ・グランデ・ド・スール州では3月16日現在、74%が生殖生長期から充実期、収穫進捗率は1%で過去5年平均（14%）より遅れている。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の実消費量は、飼料・その他需要が前月予測からわずかに上方修正され、前年度より5.4%増の56.4百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の実輸出量は、干ばつの影響を受けた隣国アルゼンチン向け輸出の拡大見通しを受け、前月予測から0.7百万トン上方修正され、前年度より17.3%増の92.7百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2023年1～2月の輸出量は603.9万トンで、前年同期（872.3万トン）に比べ30.8%減となっている。輸出先の内訳は、1位が中国410.0万トン、2位がスペイン48.4万トン、3位がタイ30.6万トンとなっている。

大豆－ブラジル

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23（22年10月～23年9月）			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	139.5	129.5	153.0 (149.5)	-	18.1	
消 費 量	49.9	53.5	56.4 (55.1)	0.0	5.4	
うち搾油用	46.7	50.3	52.8 (52.3)	-	5.0	
輸 出 量	81.7	79.1	92.7 (92.8)	0.7	17.3	
輸 入 量	1.0	0.5	0.8 (0.6)	-	38.9	
期末在庫量	29.4	26.9	31.5 (4.2)	▲ 0.7	17.3	
期末在庫率	22.4%	20.3%	21.2% (2.8%)	▲ 0.6	0.9	

(参考)

収穫面積(百万ha)	39.50	41.50	43.40 (43.46)	-	4.6
単収(t/ha)	3.53	3.12	3.53 (3.44)	-	13.1

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 March 2023)
IGC「Grain Market Report」(16 February 2023)

ブラジルのクロープカレンダー(中部から南部)

2022/23年度の実作付けは、2022年9月以降、順次開始。

2023年2月以降、大豆の収穫が行われ、その後、一部の圃場で冬とうもろこしを栽培。

2022/23年度	2022年												2023年								
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
夏とうもろこし																					
冬とうもろこし																					
大豆																					

資料：CONAB穀物レポート（2023.3.9）

< アルゼンチン > 干ばつにより大幅減産見込み（輸出税継続）

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、2月を通じての高温・乾燥の継続が、開花期を迎えていた遅植え大豆の単収に影響したことで、収穫面積、単収が下方修正され、前月予測から8.0百万トン下方修正された。高温・乾燥の影響を大きく受けた前年度より、単収見通しが更に減少することを受け、前年度より24.8%減の33.0百万トンの見込み。2008/09年度（32.0百万トン）以来の低水準の見込み。

ブエノスアイレス穀物取引所週報（2023.3.16）によれば、2022/23年度の実産量は、2月中旬の高温・乾燥に加え、霜害により、25.0百万トンと前年度（43.3百万トン）から大幅に減少する見通し。過去60年間で最悪の干ばつとも言われている。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、生産量の下方修正に伴い、前月予測から3.6百万トン下方修正され、前年度より11.1%減の41.0百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、生産量の下方修正に伴い、前月予測から0.8百万トン下方修正されたものの、前年度より18.9%増の3.4百万トンの見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2023年1月の輸出量は15.2万トンで、前年同月（42.6万トン）より64.3%減。全量がチリ向けとなっている。2022年後半の大豆の優遇為替レートの終了以降、月間輸出量は弱含んでいる。アルゼンチンは、丸大豆の搾油後に発生する大豆加工品の輸出が多く、大豆油及び大豆粕については、世界第1位の輸出国である。

USDAによれば、2022/23年度の輸入量は、生産量の下方修正を一部補うため、近隣国であるブラジル及びパラグアイからの輸入増により、前月予測から1.0百万トン上方修正され、前年度より88.8%増の7.3百万トンと史上最高の見込み。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、輸出税を設定している。2021年1月以降、輸出税を大豆最大33%、大豆油及び大豆粕31%と設定。2022年3月に、大豆油及び大豆粕の輸出税について2022年末まで2%引き上げたが、2023年1月からは31%に戻っている。

なお、アルゼンチン政府は、今般の干ばつ対策として、農業関係者に対し救済施策を公表した。

大豆ーアルゼンチン

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23（22年10月～23年9月）			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	46.2	43.9	33.0 (37.5)	▲ 8.0	▲ 24.8	
消 費 量	47.4	46.0	41.0 (42.3)	▲ 3.6	▲ 11.1	
うち搾油用	40.2	38.8	35.3 (37.3)	▲ 2.1	▲ 9.2	
輸 出 量	5.2	2.9	3.4 (2.5)	▲ 0.8	18.9	
輸 入 量	4.8	3.8	7.3 (6.6)	1.0	88.8	
期末在庫量	25.1	23.9	19.8 (2.2)	▲ 2.6	▲ 17.2	
期末在庫率	47.6%	48.9%	44.6% (4.8%)	▲ 1.3	▲ 4.2	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	16.47	15.90	15.50 (16.00)	▲ 0.40	▲ 2.5	
単収(t/ha)	2.81	2.76	2.13 (2.35)	▲ 0.45	▲ 22.8	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

「World Agricultural Production」(8 March 2023)

IGC「Grain Market Report」(16 February 2023)

写真：北部サンタフェ州の早植え大豆の圃場風景 （2月26日撮影）

収穫は4月の予定。

高温・乾燥の影響で、粒が小さく、単収低下が見込まれる。



< 中国 > 生産量、消費量は史上最高、輸入量も増加見通し

【生産・生育状況】USDAによれば、2022/23年度の実産量は、収穫面積の下方修正により前月予測からわずかに下方修正されたものの、主産地の黒竜江省等東北地区で生育期を通じて良好な天候に恵まれたことに加え、政府の補助金による大豆生産奨励策等により収穫面積が大幅に増加したことから、前年度より23.7%増の20.3百万トンで史上最高の見込み。前年11月上旬時点で、収穫はすでに終了。

2月13日に公表された中国共産党・国務院（内閣に相当）の中央1号文件には、引き続き大豆の作付け拡大の取組等について記載された。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、養豚・養鶏向け飼料用需要の低下により2月までの搾油が予想以上に低調であったことから、前月予測から2.0百万トン下方修正されたものの、畜産向け国内大豆粕需要が前年度（景気減速により豚肉を中心に食肉需要が低調）と比べれば回復することにより、前年度より5.3%増の113.3百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、前年度より4.8%増の96.0百万トンの見込み。

中国の貿易統計によれば、2022年1～12月の輸入量は91.1百万トンと、前年同期比で5.6%減。内訳は、ブラジル産54.4百万トン（60%）、米国産29.5百万トン（32%）。なお、前年12月の輸入量は10.6百万トンで、米国の収穫の終了に伴い、米国産が6.0百万トンとブラジル産（2.6百万トン）の2.3倍となった。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報2023年1月号」によると、1月の国内価格（山東省の国産大豆工場渡し価格）は、前月（6,240元/トン）から下落し、6,060元/トンとなった。主な要因としては、新穀大豆の買付価格が農家の予想を下回り、農家が販売に消極的で農家在庫が多く、春節とも重なり、業者も買い付けに消極的であったことによる。また、1月の輸入価格（山東省の輸入大豆価格）は、5,400元/トンと前月（5,500元/トン）から下落した。今後も中国の輸入動向に注視が必要である。

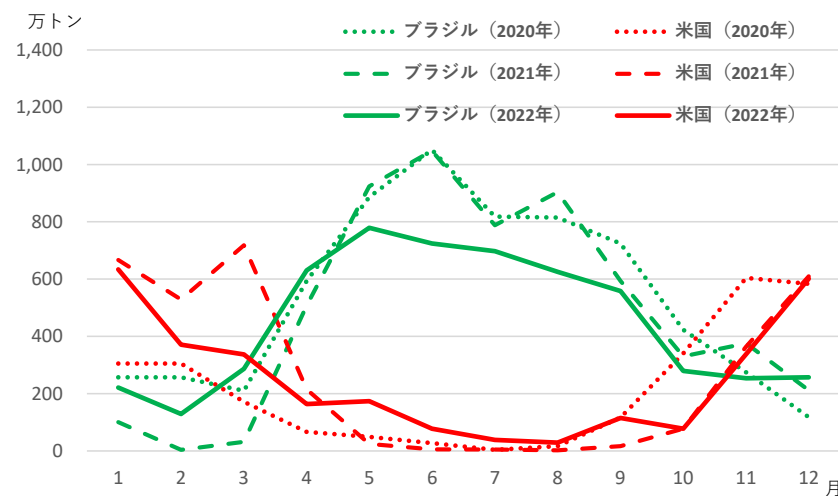
大豆—中国

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	19.6	16.4	20.3 (20.3)	▲ 0.0	23.7	
消 費 量	112.7	107.6	113.3 (114.8)	▲ 2.0	5.3	
うち搾油用	93.0	87.5	92.0 (95.8)	▲ 2.0	5.1	
輸 出 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	—	—	
輸 入 量	99.7	91.6	96.0 (95.3)	—	4.8	
期末在庫量	31.2	31.4	34.3 (29.2)	2.0	9.2	
期末在庫率	27.6%	29.2%	30.2% (25.4%)	2.2	1.1	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	9.88	8.42	10.24 (9.90)	▲ 0.03	21.6	
単収(t/ha)	1.98	1.95	1.98 (2.05)	—	1.5	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 March 2023)
IGC「Grain Market Report」(16 February 2023)

図：中国におけるブラジル、米国産大豆の輸入状況



出典：中国海関統計

注：2020年1月分と2月分は合計で公表されたため、便宜上1/2で按分

< カナダ > 収穫面積及び単収の増加により増産

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収の増加を受け、前年度より5.1%増の6.5百万トンの見込み。前年11月中旬時点で、収穫は終了。

なお、カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2023.3.21)によれば、2022/23年度の収穫面積は前年度より0.7%減少した。一方、単収は、西部カナダで生育期の降雨と温暖な天候に恵まれたことから、カナダ全体の単収は前年度より5.8%増となった。前年度において高温・乾燥で減産となった生産量第2位のマニトバ州で前年度より58.7%増と史上最高の単収となり、生産量1位のカナダ東部のオンタリオ州の単収の減少をカバーしたことが要因。この結果、生産量は前年度より5.1%増の6.5百万トンの見込み。

また、この春に作付けされる2023/24年度の実産量は、現在の市場状況と過去の傾向に基づけば、収穫面積が2022/23年度より7.3%増と予想されることから、2022/23年度より3.5%増の6.8百万トンの見込み。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度より11.3%増の2.6百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度より1.8%減の4.2百万トンの見込み。

カナダ穀物委員会(Canadian Grain Commission)によれば、2022/23年度(2022年8月～2023年7月)のうち、2022年8月～2023年1月の輸出量は293.4万トンとなり、国別では、中国(123.0万トン)向けが42%を占め、続いて、イラン(44.8万トン)、アルジェリア(32.1万トン)、イタリア(25.1万トン)の順となっている。2023年1月の輸出量は35.9万トンで、中国向けが20.2万トン、イラン向けが9.7万トンである。

大豆－カナダ

(単位：百万トン)

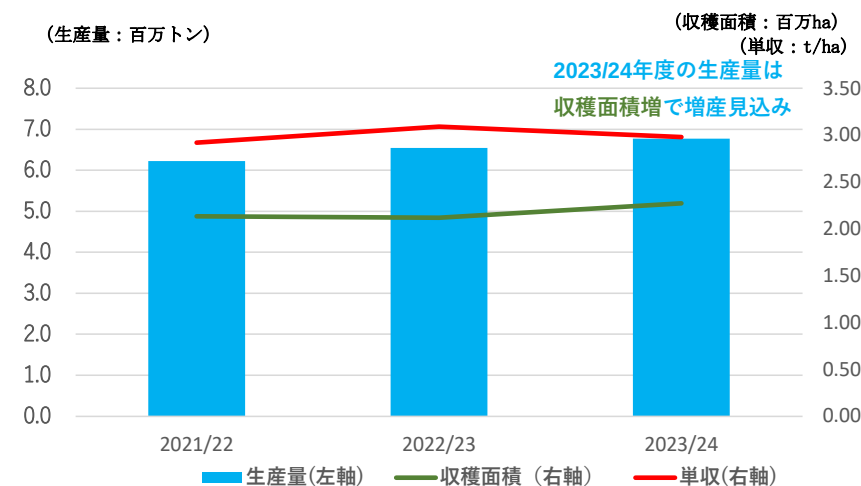
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年8月～23年7月)		
			予測値、()はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	6.4	6.2	6.5 (6.5)	-	5.1
消費量	2.5	2.4	2.6 (2.5)	-	11.3
うち搾油用	1.6	1.8	1.9 (1.9)	-	0.3
輸出量	4.7	4.3	4.2 (4.4)	-	▲ 1.8
輸入量	0.5	0.5	0.5 (0.4)	-	▲ 7.6
期末在庫量	0.3	0.4	0.7 (0.4)	-	52.1
期末在庫率	4.1%	6.5%	9.5% (5.1%)	-	3.1
(参考)					
収穫面積(百万ha)	2.04	2.08	2.12 (2.12)	-	1.9
単収(t/ha)	3.12	2.99	3.09 (3.09)	-	3.3

資料：USDA「PS&D」

「World Agricultural Production」(8 March 2023)

AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(21 March 2023)

図：カナダの直近3か年の生産量等の推移



資料：AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(2023.3.21)をもとに農林水産省にて作成。

(参考1)本レポートに使用されている各国の穀物年度について (2022/23年度)

	小麦	とうもろこし	コメ	大豆
米国	22年6月～23年5月	22年9月～23年8月	22年8月～23年7月	22年9月～23年8月
カナダ	22年8月～23年7月			22年8月～23年7月
豪州	22年10月～23年9月		23年3月～24年2月	
EU	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月		
中国	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月
ロシア	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月		22年9月～23年8月
ウクライナ	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月		
ブラジル		23年3月～24年2月	23年4月～24年3月	22年10月～23年9月
アルゼンチン	22年12月～23年11月	23年3月～24年2月		22年10月～23年9月
タイ			23年1月～12月	
インド	22年4月～23年3月		22年10月～23年9月	
ベトナム			23年1月～12月	

注 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
 例えば、2022/23年度は、米国の小麦では2022年6月～2023年5月、ブラジルのとうもろこしでは2023年3月～2024年2月です。
 なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads> (「Reference Data」タブを参照)

(参考2)単位換算表

1 容積→重量

1 Bushel (ブッシェル) (穀物により異なる)	0.027216	メトリクトン	小麦、大豆	米国等
	0.021772	メトリクトン	大麦	
	0.025401	メトリクトン	とうもろこし	
	0.014515	メトリクトン	オーツ	
1 CWT(百ポンド)	0.045359	メトリクトン	コメ	米国等

2 面積

1Acre(エーカー)	0.40469	ヘクタール	米国等
1rai(ライ)	0.16	ヘクタール	タイ
1 亩(ムー)	0.0667	ヘクタール	中国

3 その他

1ガロン	4.536	リットル	英国
1ガロン	3.785	リットル	米国
1LAKH(ラック)	10万	位取り	インド
1斤	500g	重量	中国
華氏→摂氏 : $^{\circ}\text{C} = (^{\circ}\text{F} - 32) \div 1.8$			